清代禁書

——その著者たちの思考——（下）

岡本さえ

目次

序・表
第一章　禁書内容の特色
　第一節　明清交替期の比重
　等二節　致用主義
　第三節　史学重視
　第四節　存在と認識
第二章　反満意識
　第五節　満人観の変遷——以上第七十三冊

第六節　反満意識の構造――以下本号
第三章　異端思想
第七節　明末清初の異端論争
第八節　著者たちの思考様式
第九節　思想史に占める禁書の位置

本稿は右の目次の第二章第六節から第三章第九節までの後半部である。前半部の（上）と同じく人名に傍線を施した場合は禁書著者であることを示す。また書名に波線を施した場合は清代禁書であることを示すものとする。（たとえば、高拱撰《辺略》⑩）なお、清代禁書の書名の後に付した数字（⑩）は左記の清代禁書書目一覧表における書目番号であり、各々の禁書がどの書目に収録されているかを示している。

清代禁書書目一覧表

次に掲げる書目は、姚覲元編・孫殿起輯《清代禁燬書目・清代禁書知見録》、一九五七年、上海商務印書館、三四一＋二五二＋七五＋六六p.による。下欄の数字は各書目に収録された禁書の部数を示す。

①清代禁燬書目　全燬禁書　一四六
②　〃　抽燬禁書　一八〇
③　〃　禁書総目　軍機処奏准全燬書目　七一三

④　〃　〃　軍機処奏准抽燬書目　二七二
⑤　〃　〃　浙江省査辯奏繳応燬書目　一五三
⑥　〃　〃　外省移咨応燬各種書目　三五四
⑦　〃　違礙書目　応繳違礙書籍各種書目　七〇三
⑧　〃　〃　続奉応書目　五〇
⑨　〃　補遺一　五六九
⑩　〃　〃　二　四一四
⑪　〃　〃　三　一〇三
⑫清代禁書知見録　一三九一
⑬清代禁書知見録外編　四〇四

そのほか後半部に引用される書名のうちヨーロッパの諸文化を紹介する「西学」関係書（中国士人とヨーロッパ宣教師の協力出版あるいは中国人が独自に刊行した書籍――大多数は漢籍――を指す。）に付記した数字（たとえば《西学凡》Cou. 3379）は、「西学」関係書を概観するのに便利な目録 M. Courant: *Catalogue des livres chinois, coréens, japonais, etc.* 3vols, Paris 1900.の書名番号と一致する。（右の目録に収録された図書はすべてフランスのパリ国立図書館（B.N.）所蔵であり、この番号順に配架されている。）

第六節　反満意識の構造――（第二章）

第五節で私たちは著書著者たちが、明代にはむろんのこと、清代に入ってからも表現の程度の差こそあれ、満人の中華支配に対して不信の念を示し続けていたことを見た。この根の深い反満意識こそは、清朝成立後百年以上を経た後に乾隆帝が中国各地の巡撫総督に命じて禁燬すべき書をリストアップさせる、主たる原因になるのであるが、それでは禁書著者たちはなぜ異民族支配をかくも嫌ったのか、という点をあらためて検討する必要があろう。しかもこうした強い反満意識は明朝滅亡のはるか数十年前から多数の禁書の中に顕著でもあったにもかかわらず、なぜ明朝当局は有効な対策をとらず夷狄に権力を渡してしまったのか、あるいは満人に他の夷狄とちがうユニークな点があったのかも疑問に思われる。そこで本節では、(a)夷狄と中華　(b)インフォメーション・ギャップ　(c)夷狄としての満人、以上の順で反満意識の内容を検討していきたい。

(a)　夷狄と中華

漢民族が満州族を「夷狄」と呼んではばかることのなかった時代に、禁書著者たちにとって「華夷論」はすでに完成されたものとして考えられていた。万暦年間（一五七三―一六一九）に礼部尚書をつとめ、禁書著者の申時行（汝默、一五三五―一六一四）、沈一貫（肩吾、龍江、一五三一―一六一五）らと親交のあった李廷機（爾張、九我、文節、一五八三年進士）は《性理要選》の中で「夷狄」対策をまとめている。李廷機は先ず宋代の程子（程顥、明道、

一〇三三―八五および程頤、伊川、一〇三三―一一〇七）の言として《春秋》が「華夷」をいかに注意深く分離していたかを紹介する。「諸侯は人間としてふみ行うべき道をはっきりさせて夷狄を追い払うこと。そのほかに列国は国境を固めるがよい。もし夷狄と和睦してかりにも夷狄の凶暴な侵略を免れようとするならば、それは華を乱す道である。」[1] 李廷機は続いて儒学者劉安世（器之、元城先生、一〇四八―一一二五）の意見を取りあげる。「中国が夷狄と隣り合っているのは、ちょうど金持ちが貧乏人の隣りに居るようなものだ。夷狄をもてなすには礼をもってし、夷狄と関係を結ぶには恩をもってするが塀は高くし刑法をもって威服せしめる。」[2] 中華と夷狄の国の間には使者が往来するが、中華は礼法によって夷狄を制扼する。余剰物を与えてシーズン毎に満腹させてやること。平素和議を説く中にも辺境の防備をしくじらないこと。夷狄が先に辺地を侵犯しようとしたら、はじめて兵を使うことである。と李廷機は解説する。ここに述べられた「夷狄」とは、中華が恵みを与える対象ではあっても常に警戒を怠ってはならず、文明と軍事力の圧倒的な優位に立つ中華がいつでも懲戒を示しうる相手としての、劣者のイメージである。

では中華がいかなる状況にあるとき、この均衡が破れるのか。李廷機は同じく宋代の政治家胡宏（仁仲、五峯、一一〇六―一一六二）の主張を紹介する。「中原に中原の道がなくなると夷狄が中原に侵入する。中原がまた中原の道を行えば夷狄はその地に帰るのだ。」[3] 古代の先王のように国内をうまく治め、「建国して諸侯と親しみ、高城深池を天下に普及させれば、四夷は虎のように猛々しく狼のように貪欲であってもどうして欲望をほしいままにし志を逞しくすることができようか。」[4] 国内を充実させ、「城郭、溝池」に象徴される防備を充分に行う――先王のこの配慮はいつの世にも通じる夷狄対策の「上策」なのである。内政充実の重視は、朱熹（朱子、一一三〇―一二〇〇）の言葉に端的にあらわれる。「古えの先王、聖王が夷狄を制御するやり方は、その根幹は国境での威嚇にあるのではなく徳業に

ある。その備えは辺境にではなく朝廷にある。その具えは軍兵と糧食にではなく紀律にある。必ずそうなのだ。[5]」朱熹を信奉していた真徳秀（希元、西山、一一七八―一二三五）も言う。「中国に道があれば夷狄が盛んでも憂うに足らない。〔だが〕国内がうまく治っていなければ夷狄がわずかであっても畏るに足る。[6]」

古代伝説時代からあったといわれる宋代の儒学者たちが確立した内政重視型の夷狄対策に対して、万暦の末に生きていた李廷機はいささかも疑いをさしはさまなかった。彼は元代の朱子学者許衡（仲平、文正、魯斎先生）を引用する。「天下のことはいつも両者の勝負である。勝者はその分限に止まることができず、必ず度を過ぎてから止まる。敗者は必ず極限まで行き、それから回復する。中国と夷狄〔の関係〕も同じである。中国が勝てば兵力を乱用して四方を遠征し蛮族を屈服させて臣下とする。夷狄が勝てば必ず中原を潰裂させ、中原はこの上なく残忍苛酷な目にあう。そのうえまた〔中原が夷狄に〕報復するとすればいつ止むことか。三代の盛時には中夏と外夷を別々にし、君子と小人は各々その分に安じていた。だから大いに治まっていた。後世は〔三代に〕及ばない。それに周の成王・康王、漢の文帝・景帝のように世に大治を称えられる場合にはその領土の広さからわかるのだ。かの四君は遠略を重視したためしがない。自分が治めるべき所を治めただけで夷狄に勝とうとしなかった。だからやはり夷狄に敗れることもなかったのである。[7]」許衡は世祖（フビライ、在位一二六〇―一二九三）の下で中書左丞をつとめ、夷狄が中華を支配した状態を身を以て体験した人である。現実の世界で「夷狄」に仕えた許衡の理想は三代の御世の治政であった。先王の方針にならって「夷狄」の区別をはっきりさせ中華の内治をしっかりしていれば外征の必要もなく戦争の惨禍も防げる。この許衡の意見を記して李廷機の夷狄論は終っている。李は、中華が夷狄に敗れるのは中華に道がないためで、責任は中華にあると説く宋儒の見解で充分だと考えたのであろう。ひとりとして明代の学者の意見を引こうとはしな

かった。

ここで李廷機以外に華夷の関係に触れた禁書著者の発言をみておこう。白鹿洞書院を復興し、嘉靖から万暦年間にわたって漕運総督、左都御史、刑部左侍郎を歴任した王宗沐（新甫、敬所、襄格、一五二三―九一）は《敬所王先生文集》③⑨の中で「虜」（北方の野蛮人の意）に対して中国が勝てるわけがないと指摘している。中国が勝てないのは、一、国内の人心がばらばらである。二、首脳部に対して建議をしている最中に足のひっぱり合いが甚しく、「豪傑の気を沮喪させ、時機を失ってしまう。」三、前線の軍隊は互いに連携せず、孤軍奮闘している。四、「兵は多く、無駄飯食い、財政は尽き、租税をみだりに取り立てる」。五、「役人は日ましに人数がふえるが才覚は不揃い。」六、戦闘能力がない。「虜が戦さをするときは隊伍も行列もあったものではない。利を見れば行き敗北に逢えば散るのは禽獣のようだ。しかし騎馬射撃の巧さ、飢渇の耐久力、なまぐさい気は彼等の長所で中国が畏れるところなのだ。」(8) 七、軍隊は一見、連携しているようだが内輪もめが絶えない。後年の明朝滅亡を予言したかのような七項目だが、ここでも人心の不一致、党派抗争、財政破綻など内政の乱れがまず憂慮されている。

福建出身の南京工部右侍郎何喬遠（稗考、匪莪、一五八五年進士）は後述するように実務派、西学派の官僚グループのひとりで、韓霖撰《慎守要録》③⑨にも都市防衛に対する彼の提言が収録されているが《名山蔵》③⑦⑨⑬の「兵制記」（崇禎十三年序刊本では、巻数が黒く塗りつぶされて記載なし）では内政重視の立場が貫かれている。「文臣が財を愛さず、武臣が死を惜しまなければ、天下は平和である」といった南宋の武将岳飛（鵬挙、武穆、忠武、一一〇三―一一四一）の言葉を引用した後、何喬遠は次のように述べる。「いったい今日の武将は賄賂を使わないとなれないし、宦官や権力者に贈賄しないとなれないのである。文臣は、交際するにはたっぷり贈物をしないとだめだし、

たっぷりと報酬・謝礼をしないとだめである。すでに氏になったと考える人は士大夫や顕紳のグループに入ることはいうまでもない。しかるに、ものを言おうとしないさまは口が無いかのようだ。よろいかぶとが刺繡した布よりも弱く、矢防ぎの具がくつ先の飾りよりも□[ママ]というのでは武将の気をすでに喪失している。いったい、すでに氏になったのであれば、〔氏がついたという〕そのことによって官吏になれるのであるから、重ねてまた自分の家のため利益をあげようとする。士卒以外に誰が兵士の寒さや飢えを、老いや衰弱を減らすことができようか。そうした後、法は実行されない。法が実行されなければ技能は精鋭・勇敢ではないし、軍隊は強化されない。武官が〔官位を〕得てもこれを救わないのに、さらにまた文官が〔官位〕得たからといってどうしてこれを追求するだろうか。[9]」賄賂によって役職を得た高官は国のためでなく一族の繁栄のために働き、兵卒の心は離反する。明軍が内部崩壊しているのを指摘した上、何喬遠は続けていう。「私は平生から聞いているが、督撫が武将に媚びへつらうのは十人中六、七人といってもよい。平和な時に自分から怠けていれば、国家に事が起こった時もやはり、そうだ。軍事の勝敗、領土の存亡は念頭にないのだ。ああ、士大夫がこのようでいったい国を担えるのか。このようなことで耐えられるのか。だから、不学でも学ばないし知らなくても知ろうとしない。国政の壊滅はこれにしたがうというのはこの意味なのだ。よいかな、岳飛の言葉は。武臣を論じたものだ。しかるに文臣がそれより先なのだ。[10]」外敵の勢力を論じる以前に、士大夫の無責任が国を滅亡させることを懸念して《名山蔵》は終わる。

復社のリーダー張溥（天如、西銘、一六〇二―四一）は、生前「女直」が実際に中華を征服する日が来るとは考えていなかったようであるが《七録斎集》③⑨⑫の中で夷狄に関しては中華の責任を強調する。「備倭論」の中で張溥は倭寇の盛衰は朝廷に主たる責任があり、夷狄にはない。なぜなら「海寇の発祥は中華の人が中心になっている[11]」か

らであり、密貿易がなくならないのは、「外夷の盗賊をなくすのは易しいが中国の盗賊をなくすのは難しい。中国の盗賊をなくすのは易しくとも中国の衣冠ある盗賊（高官を指す）をなくすのは難しい。まことに有力者が横車を押して金に身を亡ぼし、国家の危急を問題にもしないのは痛恨きわまる」[12]と、朱紈（子純、秋崖、一四九四―一五五〇）の言葉を引用しつつ中国内部の問題であることを強調する。「女直論」でも「奴酋が今日、患を為す」に至ったのは、守備官がみな「賄賂におぼれ遠略を忘れた」[13]ためと述べ、満州族の勢力を把握する必要性は考えていない。

明末の朝廷中枢部（戸部尚書）にあって北京陥落と共に殉死した倪元璐（王汝、鴻宝、園客、文正、文貞、一五九三―一六四四）は、時勢に明るく政務に通じていると評されていたが、一六三二年九月二五日（崇禎五年八月十二日）皇帝に対し華夷の関係について次のように進講している。「……もし能くいつもいましめ、心に怠ることなく、事をおろそかにしなければ、治道ますます隆んとなり太平が保たれます。特に中国が〔夷狄を〕服従させなくとも四夷はやはりみな教化され、ぬかずいて来朝します。伯益の言葉は以上の通りです。私が見ますのに伯益のこの説はあきらかに一篇の□[ママ]を禦ぎ勝ちを制す韜略（兵法）です。ところがいかにして武事を講ずるか、いかにしてえびすをしめつけるかについては一言も言及しておりません。すべては朝廷における精神を〔国全体に〕かかげ出すことにかかっています。したがって〔伯益の〕立言（立派な言葉を立てる）には順序というものがしっかりあります。先ず〝克己省躬〟があります。次は賢を進め邪を去ることです。さらに次は深謀遠慮です。終りは民心の収拾です。四夷を制御する術はすでにこれに尽きるのです。」[14]（《倪文正公遺稿》⑩⑫）

以上のような禁書著者たちの発言から「夷」に対する「華」の最上の策とは国内政治の安定と古代から考えられてきており、宋代の儒学者によって議論が深められて国是となり、明朝の隆盛期は言うに及ばず滅亡期にさしかかって

も文官のゆるぎない信念となっていたことが分る。しかし「華」の圧倒的優位が確立していればこのような原則論に終始できるとしても、次々に長城以北の軍事拠点を失い都市を焼かれ逃亡兵と避難民のあふれる明末になって、はたして禁書著者たちはみな倪元璐のように国内に眼を向けているだけで済んだのか、当面の敵である「夷狄」あるいは叛乱軍についてその軍事力を的確に知り有効な対策をとろうと眼を外に転じることはなかったか、という次の問題点が当然生じてこよう。さらにまた明朝が敗れ「満夷」が皇帝の座についた時、伝統的な華夷論はどのような変換を遂げたかという点も検討が必要となる。

(b)インフォメーション・ギャップ

すでに第一章第二節で述べたように、明朝が満州族の脅威を感じるようになったのは、万暦末から天啓初にかけて長城以北の拠点を撫順（一六一八年）、開原（一六一九年）、瀋陽（一六二一年）、遼陽（一六二一年）、広寧（一六二二年）とたて続けに失ってからであるが（後出の北辺地図、本書一九一頁を参照）、それ以前から明は多くの「夷狄」と交戦をくり返してきた。十六世紀中期に倭冠が戚継光（元敬、南塘、武毅、一五二八―八七）らによって破られ南部沿岸での活動が衰え始めた頃、ポルトガルはマカオに居を定め（一五五七）明軍と衝突した。豊臣秀吉（―一五九八）が朝鮮に出兵（一五九二―九八）すると明軍は朝鮮を支持し、日本と戦った。一七世紀に入るとイギリス・オランダがポルトガル・スペインに代って勢力を伸ばし、オランダは台湾に侵入（一六二一）し彭湖島を占領（一六二三）する。北方で「女真」（満州人）が着実に勢力を伸ばしている間に、中国の沿岸地域の人々は「倭人」（日本）や「紅夷」（オランダ）「仏郎機」（ポルトガル）に対し警戒を強めていた。

浙江温州生れの文人・芸術家で崇禎初に亡くなった何白（元咎、丹丘）は《汲古堂集》①⑫の中で、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、明朝が朝鮮に援軍を送ったことを「東征」と記し、それによって撃退した日本人を「醜類」と呼ぶ。「万歴壬辰（一五九二年）、朝鮮は倭が災いをしかけたので救援を請うた。〔王圭叔〕大夫は……命令を受けて東征し、かの醜類を滅ぼし大きな手柄をたててその功績は輝きわたった。[15]」同じ文集の中で何白は一六〇九年、南蛮船を詠んでいる。「夷舶は風に漂って海浜に到る。行ったり来たり傍若無人。〔夷人は〕軽やかな皮ごろも緩やかな帯に多くの計略。樹林は先に教えれば斧斤を受ける。[16]」うかつに南蛮人に好意をみせるな、彼はヨーロッパの野心を警戒する。

万暦年間、刑部侍郎をつとめた呂坤（叔簡、心吾、一五三四―一六一六）は《去偽斎集》②⑫で日本と満州族を「外夷」として並行し警戒をよびかける。「わが朝廷の敵国である外夷は、南は倭、北は□（ママ）が雄をとなえています。倭は大海の中に居り、どうして乾飯で航海して中原に猪突できましょうか。その上どうして浙江、福建から上国〔たる中国〕を蚕食することができましょうか。ただ朝鮮は東の国境にくっついており、わが〔国の〕左わきに近く、平壌の西隣である鴨緑・普州は登州・萊州の真向いであり、もし倭や□（ママ）がここを取って占有し、朝鮮の人々を藉りて兵にし朝鮮の領地で生活し訓練して天朝を窺い、進んでは漕運を断ち通倉を占拠してわが糧道を絶ち、退いては慶州全体を兵営として平壌を守りわが遼東を窺えば、一年たたぬうちに京師はのたれ死にします。これこそ国家の大憂です。[17]」

明末の歴史書は、そのほとんどが禁書とされているが、そのひとつ《天啓実録》⑦には南部沿岸のヨーロッパ人の活動に対して明朝の官吏たちが、「巨艦大砲」をもつ新手の外夷として警備にあたっていたことが記録されている。「私が考えますのに、紅毛夷は西南の和蘭国の遠夷で従来中国とは交流がなく、ただ福建商人が毎年大泥国（パターニー）及び咬嚕吧（バタヴィア）と取引きするので該夷（オランダ人）はそこにいって中継貿易をしていました。

……〔紅毛夷は〕ついに閩海に流入し彭湖〔島〕に城をつくってこれを拠点としました。口では自衛を言いますが、実は威嚇して貿易を要求しようと考えています。ところがこの夷が恃みにしている巨艦大砲は水上では便利ですが陸上では不便です。それに、その志は漢（中国）の財物を貪ろうとするだけなのです。威嚇しようとして得る所なく漸く悔心しています。[18]」（一六二三年、福建巡撫・右僉都御史商周祚の上奏）この彭湖島での築城について南京湖広道御史游鳳翔は、同年九月の上奏で、「紅夷」が福建の洋船を捕えて乗組員六百人余名に強制労働をさせ、城中に「礼拝寺」を築いたことを報告する。「進んでは攻撃に足り、退いては守備に足り、厳然として一つの敵国です。[19]」福建出身のこの御史が憂慮するのは海上交通の要所が外夷におさえられることによる中国経済の悪化、密貿易による国内治安の乱れ、警備のための費用増加などであり、地方当局者にとってオランダ人の出現は他の外夷の場合と同じように警戒し駆逐すべき対象に他ならなかったことがわかる。

注目に値するのは、こうしたさまざまな「夷」との交戦や交易、あるいは身近に「夷」を観察する機会をもった士大夫たちの中から、伝統的な内政重視の華夷論をふみこえて、それぞれの「夷」の実態をみきわめ、その脅威に対して効果的な具体策をとろうとする人々が出てきたことである。第一章第二節で挙げた南部諸省のテクノクラートたち（第七三冊、本文六〇―六一頁参照）がその中心で、徐光啓（子先、玄扈、文定、一五六二―一六三三）、李之藻（振之、我存、一五九八年進士）、葉向高（進卿、一五五九―一六二七）、韓霖（一六二一年挙人）、孫元化（初陽、―一六三一）、王徴（良甫、葵心、端節、一五七一―一六四四）らヨーロッパ宣教師とすすんで交流した「西学」派、孫承宗（稚繩、愷陽、一五六三―一六三〇）、袁崇煥（元素、自如、一五八四―一六三〇）、熊廷弼（飛白、芝岡、襄愍、一五七三―一六二五）らの前線司令官、さらにかれらを後援した周宗建（季侯、来玉、一五八二―一六二六）、曹学

佺（石倉、忠節、一五七四―一六四六）、孫奇逢（啓泰、鍾元、夏峯先生、一五八四―一六七五）、金声（正希、一五九八―一六四五）、高攀龍（存之、景逸、一五六二―一六二六）、たちも同じ立場であった。十六世期中期から沿岸での大砲使用、活発な密貿易、十六世紀末からの宣教師の入華など実戦や外夷を見慣れて育った士人たちは、北からの脅威に対しても、まず実戦に勝つこと、そうしてそのために中華がなすべきこと――新鋭の火器設備、精鋭兵の養成、統一された指揮系統――を提唱した。彼らは内乱による事態の悪化、満人の軍事力についても情報を把握しており、互いに意見交換も活発に行うテクノクラートであった。

「夷」の圧迫に対して「三代の御世」を懐しみ名君の治世を願うよりも、はっきりと敵の戦力を知り対策を立てるという現実路線を要請した実務派官僚のうち、徐光啓（子先、玄扈、文定、一五六二―一六三三）は早くから朝廷に対して明快な提案を行ってきた。彼は《徐文定公集》の「某中丞ニ復ス」書簡にこう述べている。「二十年来、遼左について次の三策をいつも無遠慮に言ってきました。もし（私の建策を）聞き入れてともに従っていたら、すべて今日の変事はなかったことでしょう。その第一はひたすら富強を計り、それによって計画的に旧遼陽を奪取し、北虜をはるか砂漠に駆逐してしまえば奴酋は鞭でたたいて使役することも可能になります。これは手のひらを返すよりも易しく、ただ朝廷が執行できるかにかかっているのです。〔これが〕上策です。南関を復興して王忠に保有させた後、帰順した者を推奨する。横江の地を棄てることなく、六万の民衆に自分で守りをかためさせる。建州の北関で猛骨歹商を謀殺し、その勅書を自分のものにした者はともに通貢を許さない。もしこの三つの事が十数年前に行われていたら禍は少く、かつ必ず効果があったでしょう。〔これが〕中策です。もしこれができないのなら、〔奴が〕必ず反くとさわぎたてることはなかったのです。日夜、殲滅しようと北上し、いたずらに彼らに危機感をもたせ用心深くし、じ

っくりと今日の勢力を養わせてしまいました。ただひそかにこれを防禦すべきなのです。撫順・清河の修復が終るのを待って守りができるようにさせるのです。兵を整え武器の手入れをして戦いができるようにさせるのです。〔これが〕下策です。[20]」徐光啓は晩年になっても一六三〇年三月五日（崇禎三年正月二二日）の「西洋神器既ニ其ノ益ヲ見タリ、宜シク其ノ用ヲ尽スベキノ疏」で「敵を克服し、勝を制すことのできるのは、神威大砲という器があるのみです。」と述べるように火器の使用を主張し続けて来た。一六三〇年にはもう満州族も火器を手に入れているが、徐光啓は、遠くから命中するすぐれた大砲ならば、まだ満人に勝てると考えていた。そのための条件として、「材料がほんものであること、製作が巧妙であること、〔火薬の〕薬性が猛烈であること。度数が精密であること」を挙げている。また一六二九年十二月十八日（崇禎二年十一月四日）の記事に、昔遼陽の守りのとき、熊廷弼に手紙をおくってゆめゆめ城外に兵営をならべて砲をおかぬよう、ただ城に拠って砲を用いさえすれば賊を平げるのに十分だと述べたが熊廷弼が聞きいれず、結局火器は敵にとられてしまった。これに対して袁崇煥が寧遠を守った時は城外に一兵も出さずに万を数える敵を殲滅した。この二者の差は大きいと徐光啓が上奏したことが書かれている。

戦いにいかにして勝つかという戦略の観点に徹した徐光啓のこの夷狄対策は、すでに十六世紀中期から中国南部にひろがり、「中国之長技」とまで言われるようになっていた火器に対する彼の深い造詣と、一五八〇年代から次々に入華したヨーロッパ宣教師から幾何学、天文学、測量学、力学などの基礎を学んだ上で習得した軍事技術に裏打ちされており、多くのテクノクラートの支持を得ていた。後年、明の遺王永明王（桂王、朱由榔、―一六六一）に従い広西で清軍に殺される瞿式耜は一六二八年九月十三日（崇禎元年八月十六日）の「火器ヲ講求スルノ疏」で「狡虜」に勝つためには西洋大砲、紅夷火砲等の「神器」を活用することが唯一の方法であり、そのためには「用器之人」「能

戦能守之人」である礼部右侍郎徐光啓、南京太僕寺李之藻、兵部武選司員外部孫元化（初陽、火東、一一六三一？）の登用が急務であると力説する。「私が考えますのに、万暦四七年（一六一九年）敕旨を奉じて訓練し使者を遣わして買い求め、西洋が進呈した大砲四門を得たのは、今の礼部右侍郎徐光啓です。天啓元年（一六二一年）建議して広東から紅夷大砲二三門を取得したのは、現在親の死で服喪中の南京太僕寺少卿李之藻です。砲台・銃砲の事がらにくわしく要所に砲台を築き銃砲を設置することを支持し計画しているのは、現在兵部選司員外郎の孫元化です。天啓六年（一六二六年）正月、寧遠の街を守り賊一万七千余人を殲滅し、後に敕を奉じ封ぜられて〝安辺靖虜鎮国大将軍〟になったのは、これこそ正に西洋が進上した四門中の第二門です。敵をしりぞけ領地を固め、効果の著しいことはすでに分っています。これまでの東西の騒動で、このことに言い及ぶ者が絶えてなかったのは、器を使える人がいなかったからなのです。[21]」

瞿式耜が徐光啓とならべて推奨した李之藻は、ヨーロッパ諸科学に強い好奇心を抱き《圜容較義》《新法算書》《渾蓋通憲図説》《天学初函》《同文算指》などの天文学、数学の紹介書を次々に出版し、論理学の翻訳《名理探》をも手がけた。徐光啓や李之藻たちのこうした西学紹介書の多くは軍事技術の向上をもめざして書かれ、西洋火器を重視する西学派・実務派の同僚たちに広く利用されたのである。おなじく瞿式耜に推選を受けた孫元化は《西法神機》[22]の中で、砲弾の射程の測定は《幾何編》と《測量法》によるし、砲弾の重さによって大砲の周囲の長さをはかるには《同文算指》《容円較義》を参考にできると述べている。これらの「西洋法」をひたすら軍事に応用し、明末の軍事技術の水準と西学派士大夫相互の固い結束を示した書は、韓霖が著わした《慎守要録》[23]③⑨であった。彼は、築城、大砲製造、射撃訓練、武器貯蔵、人心の承握など守城に必要なテクニックについてのテキストを作り、そこに新しいヨ

ーロッパ人の技術をもりこんだ（望遠鏡、仏郎機、射撃法、修築法等）。それと同時に彼は、徐光啓、何喬遠、葉向高、王徵、孫元化、王鶴鳴たちの意見を記録し、いかに敵を倒すかについて有効な方法をオープンに語りあうという、めずらしい形式の本を作った。明滅亡の前年（一六四三年）に書かれた焦勗の《火攻挈要》(24)も「虜寇が民を虐げ惨禍をあたえている」ことを目撃し、「西師」（アダン・シャル、湯若望 Adam schall von Bell 一五九一―一六六六）に教えを乞うて「神器」の図解と詳細な考察を行った本であり、西学派の活発な軍事研究を裏付けている。

夷狄の軍事力を充分に探り、情報を共有した上で有効な戦略をしくという、実務派・致用派テクノクラートたちの満人対策は、激戦地で旗色の悪い明軍を支えるため苦闘していた司令官たちにとってこそ、唯一の打開策として支持されていた。私たちはすでに第一章第二節で、南部諸省の官僚たちが「致用」（実用に役立つ）ならばたとえ「西夷」（西洋人）「紅夷」（オランダ人）の武器や技術であろうとためらいなく「華」に取り入れ、その効果が、孫承宗（稚繩、愷陽、一五六三―一六三〇）や袁崇煥（元素、自如、一五八四―一六三〇）たちの軍事的才能とあいまって一六二六年（天啓六年）の寧遠における明軍勝利をもたらしたことをみたが、これらの前線で活躍した指揮官こそは、「華夷」の関係をひたすら両者の戦力から捉え、「夷狄」対策を勝利のための手段にしぼり切ったという点で徐光啓たちの現実重視路線の最大の推進者といってよい。遼東巡按・遼東経略として一六一〇年以前から拠点守備を主張し、徐光啓とも交信のあった熊廷弼（飛伯、芝岡、襄愍、―一六二五）は、《熊襄愍公尺牘》⑫の中で兵部・刑部に宛てて満州族の強さとその対策を説いている。「……東人の戦法はひとつひとつ効果的です。阿骨打たちが事を行う場合には決死兵が前にいて精鋭兵が後ろにいます。決死兵は二頭の馬を次々に用いて前方に突進します。前がことごとく死んでしまっても後ろが前を回復します。もしも退却する者がいると後ろの人間が退くやいなやこの者を殺します。

明朝末期の北辺

黒龍江
松花江
牡丹江
寧古塔
鴨緑江
渾河
遼河
原鎮
開鉄
建州
撫順
遼陽
瀋陽
義州
平壌
西喇木倫川
老哈川
熱河
大凌河
錦州
広寧
寧遠
広寧前屯
山海関
蓋州
金州
登州
莱州
北京
永定河
滦河

前進しないことを恐れずにはいられないし、やむなく前進します。おそらくこうした習俗が、西北の虜と戦い方を違うものにしているのです。これは必ずや我方の弓矢を疾くしても敵にかなうわけはありません。ただ火器と戦車の方法ひとつだけがこれを防禦できるのです。[25]」撫順、遼陽、瀋陽の三鎮を守備隊が心を一つにし情報や兵力面で協力しあい、「敵がとりでに突撃して来たら、ひたすら火器を用いて撃退する」ことを決意していた熊は、西学に造詣のあった太僕少卿蘇茂相（弘家、石水、一五六七―一六三〇、《撫浙疏草》⑤の著者）に書き送っている。「敵を制圧するには必ず火器が必要です。近頃文受寰から来た手紙では黄鐘梅が呂宋（フィリピン）にならって大銅砲を鋳造しようとしているそうです。一発で万人を斃すことができます。……もし工部と協議して銅を買い十数門を造ることができ、砲車で遼陽城に運んで来れば、無敵の神器です。[26]」首都から送られてくる火器は試し打ちに耐えない粗製品が多く、大砲も極めて少く、現地製造しようにも鉄材もなく、指揮官は凡庸な者ばかり、飢餓のために逃亡兵が続出し、馬は餓死し、演習に使う弾薬もないという窮境の中で熊廷弼は部下を励まし、守勢から逆転・攻勢に向うかすかな可能性を探っていた。「歩兵を選抜し、戦車隊を訓練したいと切に望んでいます。火器の優秀さにより〔虜の〕弓矢に勝ち、歩兵の優秀さにより虜の騎兵を制し、現地〔遼東〕の兵の優秀さによって要害の地を奪います。少しずつ圧力をかけ進む為だけなのです。[27]」一六二二年（天啓二年）僉事となった袁崇煥（後の遼東提督）も《袁督師遺集》の中で「ただ機器の使用を待つこと甚だ急です」と述べ、一六二七年七月十八日（天啓七年六月六日）の「錦州捷ヲ報ズルノ疏」で「敵はまた増兵して攻めてきました。城内では西洋の巨砲・火砲・火弾それに矢や石を用い、城外の士卒を損傷させたこと数え切れません。[28]」と火器の効果を証言している。禁書《孫高陽集》⑤のほか、火器を用いた戦法を問答形式で伝えた《車営百八叩答説合編》を著した孫承宗は、一六三二年、周文郁撰《辺事小紀》③⑦⑨に序を寄せ、

「国家はまさに全力でもって、孽奴（悪いあいつら。満人を指す）を駆逐せねばならぬ」と力説した。

前線司令官たちのこれらの叫びはいったい中央に届いたであろうか。朝廷の大官たちは彼らの後循となって現場の情報と要求とを明朝の施策に反映させ得たであろうか。沈国元撰《両朝従信録》は、泰昌・天啓（一六二〇―二七）年間の朝廷の動きを上奏文によって刻明に伝えている異色の資料集であるが、その第二巻には早くも一六二〇年十月十七日（泰昌元年九月二二日）に遼東経略熊廷弼を糾弾する御史張修徳の言葉が記録されている。「……廷弼は何の面目があって入関したのか分りません。経略熊廷弼は無頼漢で衆人を統率して悔りを受けない才覚が全くありません。徒らに報復し人を凌ごうとする気があるだけです。内に対しては引き立てられることをあてにし、人の噂を聞いて続けざまに出動するとびっくりぎょうてん……外に対しては奴のかしらをおそれ、胡馬のいななきを開くや肝っ玉もつぶれます。」[29] しかし司令官たちが次々に寄せる「奴は既に食料は足り、草は長く馬は肥えています。しかるにわが城郭は未だ完成せず人心は定まりません。」[30]（経略王在晋）という共通した訴えを受けて中枢部の官員たちも遼東の防衛についての建策を皇帝に提出している。一六二七年八月（天啓七年七月）の上奏文は次のように述べる。「軍隊の中で計画すべきことはまだ多数ありますが、目下緊急事は四つあります。一つは錦州は守らねばならないということです……一つは塔山は都市とせねばなりません（錦州・寧遠の連絡のため）。……一つは火器は〔担当者を〕訓練しなければならないということです。奴と争ってきた数年のうちに我方の馬術と弓術は奴にかなわなくなりました。もし百歩以上離れた所から奴を狙撃するならば、神器の至るところ奴の馬上からの射撃は施すすべがありません。我方の火器は精巧でなかったためしがなく、火薬は少なかったためしがありません。要は必ずどれも各々その用を尽させ

人々はみなその能力をほしいままにさせることです。そうすれば一器で数人の奴を斃すことができ、一人で数器を発射することができます。すなわち少数でもって多数に対抗するのです。まさに勝たないためしはありません。いわんや我方の兵が奴に倍するのは数えるまでもありません。一つは車営は備えがなくてはならないということです。それはこの火器を均しくすることです。〔火器は〕守城に用いるならば余裕たっぷりですが進攻するには足らないというのは、外でもありません、とりでが堅固でなく、その（火器の）技能を展開する拠り所がないのです。我方のとりでを堅め、奴が突撃するのを拒むのには、車に及ぶものはありません。[31]」火器の配備に要求の大部分を費しているこの上奏文は、要望通り火器を充分に備えた兵営が関外にあちこちできれば「進んでは〔営に〕憑いて攻め、止まっては〔営に〕拠って守ります。そうすれば常勝無敗の勢いは常にわが方にあります。[32]」と自信をみせる。安全圏にいるこうした内官の奏疏は、楽観的にすぎると見ることもできようが、朝廷内で「奴」に対抗する切り札として火器を重視する意見が出ていたことは認めてよい。朝廷内にいた大学士葉向高（進卿、台山、一五五九―一六二七）、吏科給事中（のち左都御史）曹于汴（自梁、貞予、一五五八―一六三七）、刑部尚書蘇茂相（弘家、石水、万暦二十年進士）、兵部尚書王在晋（明初、万暦二十年進士）らの実務派官僚たちの実戦本位の主張が、天啓年間の絶えまない党争と権力斗争にもかかわらず廷内世論の一部となり、かれらの「西洋火器」に対する強い期待が前記の奏疏の背景となったと考えられる。崇禎初、魏忠賢（一五六八―一六二八）の失脚後、政界復帰した徐光啓（前出）の礼部尚書登用（一六二九年）は、こうした致用派・実務派の士大夫たちの希望をつなぐものであった。

問題は、朝廷において内政重視の立場をとる伝統派と、「夷狄」対策の実戦に主眼をおく実務派と、そのいずれが政策を決定し得たか、という点であった。李遜之撰《三朝野紀》⑤⑫によると、崇禎末期（一六四三年）、山海関よ

りも手薄の薊州、通州から侵入した「北兵」が山東省に直行し「省全体じゅうりんされない所はない」状態にあった時期、御史楊若槁が「西洋人」（ドイツ人イエズス会士）湯若望（アダン・シャル、前出、一五九一―一六六六）を推挙して大砲を製造させ敵を防ぐことを提議したのに対して、左都御史劉宗周（起東、念台、克念子、一五七八―一六四五）は次のように奏した。「国の大事は仁義を根本とします。若望（シャル）は、これまでずっと邪教（天主教）をはばかりもせず唱えてきました。堂々たる中国が、もしその小技を用いて敵を防いだらどうしてもの笑いの種にならないことがありましょうか。」崇禎帝は言う。「火器は中国の長技であるぞ。若望は外夷とはみなされまい。」劉宗周は重ねて奏す。「若望のつまらぬ技が何の役に立ちましょう。成功するか失敗するかは目下慎重に督撫を選ぶことにかかっています。もし文官が金をほしがらず、武官が死を恐れなければ、どうして太平でないことを心配することがありましょうか。」[33] これが一六四三年一月十九日（崇禎十五年閏十一月二九日）の百官を召集した御前会議での議論であった。首都はその一年二ヶ月後に李自成（一六〇六―四五）の支配下におかれたのである。

私たちは、明の忠臣・遺臣として称えられる儒官劉宗周の発言に、徐光啓ら実務派の士大夫たちの行手をさえぎった強い伝統志向、内政重視路線を認めることができる。名臣とうたわれた倪元璐もまた「西洋火器」の導入を評価しようとはしなかった。彼は役目として高官の死を悼む祭文を書いたり官吏の業績を講評したりしているが、あれほど西洋軍事技術、暦学、農学、光学、幾何学等、「西学」の導入に努力した徐光啓に対して、はなむけの言葉は、「文武ヲ兼有ス」とあるのみである。また、一六四四年一月（崇禎十六年十二月）湯若望（アダン・シャル）の資源活用の提言を受けて、崇禎帝が戸部に鉱山開発を命じた時も、倪元璐は万暦年間の「礦使」「礦賊」の弊害や、墓地や地形にくわ入れするたたり（？）を理由に反対している。

さかのぼって万暦末から徐光啓たちが要請してきた「火器」の充実、精鋭軍の育成に対してもいぜんとして朝廷内には、遼東にはさしたる脅威もないのに巨額の国庫を支出すると考える高官たちも多く、彼らは「小民の膏脂」（百姓に税金負担が多すぎる）を公的な理由として遼東重視に反対してきたのであった（例えば王家楨撰《王司馬奏疏》⑥巻二、戊辰（一六二八年）六月念七日召対平台記言）。私たちは、第一章第二節で、最後まで明朝に殉じ、満人の脅威に屈しなかった儒家、黄道周（幼玄、石斎、忠烈、一五八五―一六四六）、劉宗周、呉応箕（風之、次尾、忠節、一五九四―一六四五）たちが清朝の兵が彼らの前に出現するまで満州族の勢力を知らなかったことをみたが、こうした情報のおくれは、朝廷での発言に反映されて明朝が適確な軍事政策をとることを妨げたのであった。いいかえれば、情報の豊富な、技術に精通した実務派の意見が、中枢部でついに主流となりえなかったところに、明朝が、あれほど膨大な遼東政策の論議を行いながら、一方的にずるずると敗北を重ねた原因があったように思われる。

ⒸC夷狄としての満人

「華」の充実こそが「夷」を退けるという伝統的な華夷論は、明朝末期満州族の急激な伸張によっても根本的な変動を受けず、朝廷の大官たちは最後まで内政重視の政策を貫いたことを私たちは見てきた。さまざまな「夷」との交戦や貿易を経験している沿岸部の「華」の人々、北辺で実際に満州人と戦う「華」の将兵、この中からあらわれた実戦、実効を重視する実務派官僚たちは、明朝滅亡の数十年も前から満人撃退の方法を提案しながら、政治的発言力は弱く、つねにアウトサイダーの位置に終始したのである。「華」の永続を信じ、情報に乏しい保守的な大官が、ありあまる情報と知識をもつエキスパートを退けたこと、明朝におけるこのインフォメーション・ギャップこそが、膨大

な軍事費と兵員、物量作戦、建策にもかかわらず、正規兵わずか八万といわれた入関前の清軍にやすやすと「華」をあけわたす結果を招いたのであった。

それでは明朝そのものが存在しなくなり、李自成軍を倒した清の軍隊が漢人の部隊も従えて中国全体の支配にのりだした時、「華」の人々はどのような意識でこの危機に臨んだのか。激しい抵抗をして死んで行った漢人は、「華」の正統な支配者であることを宣言した清朝の、何を容認できなかったのであろうか。

呂毖撰《明朝小史》⑦⑫は、崇禎帝の死後南明政権の兵部尚書となり清軍に殺害された史可法（憲之、道鄰、忠靖、忠正、一六〇―四五）が清朝からの降伏勧告を拒絶した手紙「閣部史可法燕京ニ復セルノ書」を収録している。史可法は先ず、福王（朱由崧、弘光帝、―一六四六）を崇禎帝の正式の後継者として認めない清朝に対して次のように反駁した。「今上皇帝（福王）はほかでもなく神宗（万暦帝、朱翊鈞、一五六三―一六二〇）の孫である。光宗（泰昌帝、朱常洛、一五八二―一六二〇）の息子同様である。（福王の実父は朱常洵、一五八六―一六四一）そうして大行皇帝（崇禎帝を指す）の兄であられるのだ。」[34] 次に満州族が中国の正統な王朝を樹立しうるという清朝の主張に対して反論する。「本朝（明朝）が世に伝わること十六代、正統に相い継承してきた。衣冠の族となってからその継絶存亡に〔本朝の〕仁恩は遠くまで及んできた。貴国は昔、先朝のもとでいつも封号を受けてきた。『載ハ盟府ニ在リ』（誓いの言葉を記した文書は今も役所にある。左氏、僖公26）。〔このことは〕どうして知れわたっていないことがあろう。今〔汝らが〕本朝の災難に心を痛め、謀反した逆賊（李自成）を駆逐したのは、大義また歴史に名高いと言うことができる。昔、契丹は宋と和議を結び、年の収穫を留めて金やきぬものを送った。回訖（ウイグル）は唐を助けたがその土地を利したということは聞いたことがない。いわんや大国は世がうまくいくことを篤く念じている。軍は義によって動

くべきで、万代にわたって仰ぎみられるかどうかは、この一つの行動にかかっている。もしわが国家の難に乗じてわが領土を窺うならば、徳を為してまっとうせぬこととなり、〔これは〕義をもって始めて利をもって終ることで、賊人からひそかに笑われよう。」[35] 史可法は長江以北を短時間に平定し、さらに今彼が守備の責任をもつ江南に大兵を送り来る清の圧倒的な実力を前にして、かって明代の士人が使った「奴」や「虜」の呼び名は使用せず「貴国」「大国」と呼びかけている。しかし明朝に対して臣下の礼をとった満州族は、あくまで契丹や回訖と同列にある「夷狄」にすぎないという認識を史可法は変えていない。清は昔の「華夷」関係を認め「夷狄」の範囲で行動すべきであり、叛乱軍李自成によって倒れた先帝の後継として朱一族のひとりを擁立し明朝を回復することに協力すべきだという主張を貫いているのである。史可法の書は一顧だにされず彼が守備する揚州は一六四五年五月多鐸（豫親王、定国大将軍、一六一四―四九）の軍隊に包囲されて一週間で陥落する。自殺未遂の史可法は捕えられ降伏を拒否して殺された。

魯王（朱以海、巨川、一六一八―六二）を「監国」と奉じて自らも復明運動に生涯をかけた張煌言（玄箸、蒼水、一六二〇―六四）は、《北征紀略》③⑨の中で、福王擁立を多爾袞（睿親王、摂政王、奉命大将軍、一六一二―五〇）に対して説き満州族の皇帝即位に反対した左懋第（仲及、蘿山、一六〇一―四五）の最期を伝えている。「……〔八月〕二十日〔左懋第は〕鉄鎖を三重に巻かれて内朝に入った。彼は喪装の冠・白袍を着けて北面せず南向して廷下に坐した。摂政王は心中大へんこれを尊敬し左懋第を生かしておき、その上彼を重用したいと思った。〔摂政王は〕廷にいる漢臣に「卿らは何か言うことがあるか」と問うた。吏部侍郎が言った。『崇禎のために（摂政王に訴えに）来たのなら許せるが福王のために来たのは許せない。』左懋第が言う、『若し今上（福王）が先帝（崇禎帝）の何にあたる人かと言うのなら、〔汝らは〕先朝の会元に合格し今日何の面目があってここにおり私にむかってものを言うの

か。』〔吏部〕侍郎は言葉に詰ってしまった。兵部右侍郎が言うには『貴方はどうして盛衰というものを御存知ないのか。』左懋第は言う、『貴方はどうして廉恥というものを御存知ないか。』ここに到って廷内にはもう発言するものがなくなった。摂政王が言う、『爾は既に明臣であるのに何ゆえわが〔清〕朝の粟を半年も食ってなお死なないのか』。左懋第は言った、『爾は侵入してわが〔明〕朝の粟を御馳走になっていながら逆に私が爾の粟を食うというのか。それに昔中原（中華）のために力を尽しながら外国の食を頼みとする（漢奸となった）者もいる。わが国家は不幸にもこの大騒動にあっているが（救い主となる）聖子や神孫がどうしていないことがあろうか。私は今日一度死ぬだけのことだ。この上何を多言しよう。』摂政王はは顔色を変え勢いよく進み出て左懋第を斬った。[36]」左懋第の死を書きとめた張煌言は、さきほどの史可法の書を収録した呂毖と同意見であり、満州族は歴然と「外国」の人間であって崇禎帝が死んだからといって「中原」に君臨することはできない、明朝の後継者は皇帝の血すじを引く朱一族であるべきだと考えているのである。さらに張煌言は、明朝の下で栄えある科挙合格者となりながら、栄枯盛衰にかこつけて異民族の下で高位についた漢人官僚「弐臣」に対して、廉恥心をもたない、漢民族の誇りを捨てた者として侵略者満州族に対する以上の怒りを向けているのである。

史可法がすでに殺され、江南に戻ろうとする左懋第が北京に軟禁されている頃、揚州では《揚州十日記》③⑦⑫（王秀楚撰）で知られる大虐殺が清の軍隊によってなされつゝあった（一六四五年五月二十日から二九日）。それは満州族の習俗「弁髪」を中国全土に強制する薙髪令に対して江南地方が強い拒否反応を示したため、見せしめとして揚州を選んだといわれている。ついに「夷」の習俗に「華」が追随せねばならない日が来たのである。揚州と同様江蘇

省の松江華亭出身で、陳子竜（人中、臥子、一六〇八―四七）、張溥（天如、一六〇二―四一）らの禁書著者と活動を共にし、明滅亡以後は、唐王（朱聿鍵、一六〇三―六二）桂王（朱由榔、永明王、一六二三―六二）たちに仕えて反満活動を終生続け、ヴェトナムにまで行って復明の援助を求めようとした徐孚遠（闇公、復斎、一五九九―一六六五）は薙髪令以降、終生髪にこだわり続け、留髪に明朝復活の願いを託していた。彼の詩文集《交行摘稿》に収められた伝記（「東海先生伝」王澐撰）によると、徐孚遠は蘇武（子卿、―前六〇）が匈奴に捕えられ十九年間降伏せずついに帰国した忠節に倣い、殉死せずに満人支配の中国で漢人の風俗を守りぬこうとした。満州族が「髪を留めるか頭を留めるか」と迫るのに対し、その両方を留めることを誓ったのである。「私はどうして髪を保って死ぬなどということがあろう。必ず髪を切らないで生きるのだ。従容として義に就くのは困難な事ではない。但し今天下の情勢はちょうど父母の病いがあついのと同じだ。生存の方法がないとはいえ、子たる者がどうして先に死んで顧みないことがあろうか。」[37] さらに清代に入って知府の朴懐王という徐孚遠の弟子が、山に遁れている師に対して僧になって帰郷することをすすめた時徐孚遠は、「おれは孔孟の徒だ。どうして釈氏によって生をむさぼることができようか。頭をきられようと髪はきることはできぬ」[38] と叱った。後年この知府は徐孚遠の伝記の著者に涙ながらにこの言葉を伝えたという。反攻の望みを託した鄭成功（明儼、一六二四―六二）の死後、徐孚遠は福建の島を退いて広東省潮州の山中で「ついに髪を全うしたまゝ、痛憤し続けて血を吐くこと数升にして没した」[39] と別の「小伝」（林霍）は述べている。

徐孚遠のように反満運動のシンボルとして薙髪を拒否し、復明をめざして生き続けようと誓った人もあったが、実際に清軍に占領されている地帯で公然と薙髪令反対を唱えた人がいるとすればそれは直ちに生命を投げ出すことに等しかった。張煌言（前出）の《北征紀略》には左懋第（前出）が薙髪に反対して示した行動も記されている。「閩六

月十五日（一六四五年八月六日）、江南が既に平定されたという理由で〔満人〕は再度薙髪令を下し、左懋第に投降を諭した上に髪を髡ろうとした。左懋第は従わなかったが中軍副将の艾大選はまっさきに法令通り髡った上、懋第に投降を勧めた。懋第はおおいに怒り従官の立杖を揮って艾を斃した。事件は追求され〔左懋第は〕十九日刑部に捕えられた。刑部は、さっさと頭を薙って降らないでかってに自ら杖で人を殺すとは何たることだと言う。懋第が言うには、吾が頭は断つことができるが髪は薙ることはできぬ。私は命を奉じて北来した。すでに一死の準備はできている。どうして今日になって自ら敗北して汝らと仲間になるのを承知しようか。それに艾大選は頭を薙り、まっさきに叛いた。軍法によって四通八達の大通りにさらし首にできないのが残念で私自らわが法を施行したのだ。このおれを殺すならさっさと殺したらどうだ。こうして遂に〔懋第は〕投獄された。[40]明朝の忠臣左懋第から見れば、薙髪は「中華」たることを自ら放棄し「夷狄」の習俗をとりいれる叛徒の行為である。張煌言は左懋第の発言を通して、満州族が「中華」の伝統を犯していることに対する憤りを表明したのであった。

激しい弾圧にあって江南の人々が反清活動をあきらめ薙髪令を受けいれてからも、この強制は漢人士大夫にとって「以華変夷」（中華を夷狄にかえてしまう）政策のシンボルと映り、苦痛は消えることがなかった。寧波の人周容（茂三、鄮山、蹙堂、一六一九―七九）は、《春酒堂遺書》③⑦⑨⑫に「髪冢銘十首」を遺し明朝滅亡後十年間の、髪に関わりあるエピソードと彼の感懐をもりこんだ詩を記している。一六四六年九月三日（順治三年七月二十四日、ただし周容は清朝の元号は使わず、たんに丙戌としている）、周容は後部に弁髪を垂らす満州族の「薙髪」には従わず、完全に剃り落して僧侶となった。おもてむきの理由は「煩悩をすすぎおとし、身の係累をとり去る」というものであった。髪は「精気」を分けるから丸坊主になった以上「神」の影響を受けないはずである。しかしこれ（切った髪）

を水に流したりしてはいけない。「かりにも海外諸島に流れて禍福を生じ蛮夷の血食を受けることがあってはいけない。そのわけは、妖しい蛟（みずち）や霊ある亀が汝の気の魄（かたまり）を借り得て風雨を乱す。〔だから〕いけない。」ならばこれを火にくべるとよいか。「兵火は互いに触れあい、鬼は煙の中に満ちている。かりにも青燐を駆逐し怨毒の気に乗れば草木にあたり、禽獣をそこなう。いけない。」[41]

こうして僧になった周容は、しかし青草を刈っても生えてくるのと同じく、剃ってもすぐに延びることに気付く。八月（旧七月）に剃った頭は冬にはもう一寸ほどの髪が生えていた。一六四八年一月（順治四年十二月）、尋ねてきた客の話で周容は髪が長いと反満運動の嫌疑がかかることを知る。「数えてみると予はこれまでもう六、七回薙ったことになる。ああ。」一六四八年（順治五年）の夏、彼は満州族の「鞭箠」（武力）に辱められている漢人の髪形を嘆き、伸ばす決意をする。しかし髪が二寸に伸びては禁にふれることを知り、一年足らずで切る。幾度となく髪を切りながら、周容は髪は精神をあらわすと考えるに至る。「髪は心の苗なのである。心の苗は、首（こうべ）にあっては髪となり、腕にあっては文章となる。心には少しの血があり、久しく貯めておくと新鮮でなくなる。これを頻繁に使って新陳代謝させねばならぬ。だから予は文章を好み、頻りに推敲して倦むことがない。髪もまさにまたこれに似ているのであろう。」[43] 出家していた周容は心の苗を一方で文章に発散させ、もう一方では「欣然」と髪を切ることでさっぱりと解決しようとした。しかし出家しない多数の漢人は、夷狄の習俗に従って異様な形式で「心の苗」を切りとるほかなかった。私たちは、清朝に協力した武臣たち――たとえば陳名夏（百史、一六五四）――さえも、清朝の薙髪令に不服を唱えたことを見たが、[44] 禁書著者たちにとって髪は、衣冠と同じく漢人文化の一部を構成するものであった。武力で征圧された漢人士大夫たちにとって、漢人の世界を残す道は、彼等の文化をできるだけそのままの形で保つことで

ある。伝統文化を犯されることへの怒り――薙髪令への抵抗は、単なる髪形の問題でなく禁書著者たちの精神生活と結びついていたと考えられる。だが禁書著者たちの反満意識は何を軸にして動いていたのであろうか。次に私たちは禁書内容のもうひとつの特徴である著者たちの異端思想を検討することにしたい。

1 「諸侯方伯、明大義以攘郤之義也。其余列国謹固封彊可也。若与之和好以苟免侵暴、則乱華之道也。」李廷機輯《性理要選》四巻、万暦十八年跋刊本、巻四、夷狄、69b

2 「中国与夷狄為隣、正如富人与貧人隣居。待之以礼、結之以恩。高其墻垣、威以刑法。」同右

3 「中原無中原之道、然後夷狄入中原也。中原復行中原之道、則夷狄帰其地矣。」同

4 「……建国親侯、高城深地、徧天下、四夷雖虎猛狼貪、安得肆欲逞志。」同、69b-70a

5 「……古先聖王、所以制御夷狄之道、其本不在乎威彊、而在乎徳業。其備不在乎辺境、而乎朝廷。其具不在乎兵食、而在乎紀綱。蓋決然矣。」同、70a

6 「中国有道、夷狄雖盛、不足憂。内治未脩、夷狄雖微、有足畏。」同

7 「天下事常是両件相勝負。但勝者不能止於其分、必過其分而後止。負者必極甚、然後復。如中国与夷狄、中国勝、窮兵四遠、臣服戎夷、夷狄勝必潰裂中原、極其慘酷、更相報復、何時能已。三代盛時、分別中夏外夷、君子小人各安其分、所以大治。後世不及也。且若周成康、漢文景、世称大治者、而其土宇広狭可見。彼四君者未嘗事遠略也。治吾所当治者而已。不取其勝夷狄也。故亦不至為夷狄所敗焉。」同、70b

8 「夫虜之為戦也、非有行伍部曲也。見利則赴、見敗則散、若禽獣。然而其騎射之工、飢渇之耐、敢前之勇、腥臊之気、則皆彼之長技而中国之所畏也。」王宗沐撰《敬所王先生文集》三〇巻、昭和三八年用北京図書館蔵万暦元年豫章劉氏刊本景照、巻一五、8b―9a

9　……岳飛曰、文臣不愛財、武臣不惜死、天下無事矣。「夫今日之武将、非請賂不得、非賄中官権門不得也。文臣与之処、非厚贈遺不得也。非厚酬謝不得也。彼以為已氏也、以列於士大夫・縉神之林、固然也。抑而不敢声、若無口者也。甲冑弱於縷綉、靺鞨□於履絇而将気已喪也。夫已氏也、以是得居其官也、而又欲肥其家也。舎士卒之外、何人可朘削士寒飢也、老弱也、而後法不行矣。法不行則技不精勇、伍不充実。武吏不得而振之、文吏又安得而問之也。」何喬遠撰《名山蔵》百九巻、崇禎十三年序刊本、巻之□、兵制記、12a—b

10　「予平居聞、督撫所以吮嗜武将者、十六七猶可云、時平自怠棄、至於国家有事猶然。軍事之成敗、疆土之存亡、不寘念也。嗚呼士大夫如此其負国也、如此其忍也。繇不学也不学、則不知道也不知道而国事之壊随之矣。旨哉、岳飛之言也、其論武臣也、而文臣先之也。」同、12b

11　張溥撰《七録斎集》六巻《論略》一巻、明刊本、論略、巻一、「備倭論」、29b

12　……朱執有言曰、「去外夷之盗易、去中国之盗難。去中国之盗易、去中国衣冠之盗難。蓋深痛強有力之為横、以身殉貨、而亡計国家之急也。」同、29a

13　同、「女直論」、14a—15a

14　「……若能時時儆戒、無怠于心、無荒于事、則治道益隆。太平可保、不特中国服従、而四夷亦皆向化、稽首来朝矣。伯益之言如此。以臣観之、伯益此説、分明旨一篇禦□制勝的韜略。然却不曾一言説及如何講武、如何詰戎。全在提挈廟堂上的精神。故立言極有次第。先在克己省躬。次之進賢去邪。又次之審謀慎慮。終之以収拾民心。而控制四夷之術、已尽于是矣。」倪元璐撰《倪文正公遺稿》三巻《講編》二巻《代言選》五巻、康熙四六年序刊本、講編、経筵、6b—7a

15　「万歴壬辰、朝鮮以倭患請援、大夫……銜命東征、殲其醜類、宏勛懋昭煌煌乎烈矣。」何白撰《汲古堂集》二八巻、道光十六年東甌魯氏重刊本、巻一、一a

16　「夷舶漂風到海浜　自来自去若無人　軽裘緩帯多方略　林木先教受斧斤」同右、巻二二、20b

17　「我朝敵国外夷惟南倭北□称雄、倭居大海之中、豈能航糗糒豕突中原、又豈能自浙閩蚕食上国哉。惟是朝鮮附在東陲、

近吾左掖、平壌西隣鴨緑晋州直対登萊。償倭□取而有之、藉朝鮮之衆為兵、就朝鮮之地為食生聚訓練、窺伺天朝、進則断漕運、拠通倉而絶我餉道、退則営全慶、守平壌而窺我遼東、不及一年、京師坐困、此国家之大憂也。」呂坤撰《去偽斎集》十巻附《闕疑》一巻、呂子遺書所収、巻一、奏疏、15 a

18 「按紅毛夷者、乃西南和蘭国遠夷、従来不通中国。惟閩商毎歳給引販大泥国及咬嚩吧、該夷就彼地転販。……遂流突閩海、城彭湖而拠之、辞曰自衛、実為要挾求市之計。然此夷所恃巨艦大砲、便於水而不便於陸、又其志不過貪漢財物耳、即要挾無所得、漸有悔心。」国立中央研究院歴史語言研究所輯《明清史料戊編》民国四二年四三年台北国立中央研究院歴史語言研究所排印本、第一本、1 p.「天啓紅本実録残葉」

19 《大明熹宗悊皇帝実録》八七巻、中央研究院歴史語言研究所景印明実録所収、巻三二

20 「二十年来、毎毎妄言遼左三策、若肯相従、俱可無今日之変。其一一意為富強計、因而規取旧遼陽、駆北虜于絶漠之外、即奴酋可鞭箠使之。此易於反掌、在廟堂一主持耳、上策也。興復南関、令王忠有後効順者勧矣。無棄横江之地、使六万之衆人自為守。建州北関謀殺猛骨歹商、而幷其勅書者、俱無准其貢。若此三事、皆在十数年前、令反亟而禍小、且可必有功。中策也。若不能、然便不必訟言其必反、日夜求勦滅于上、徒使彼操危慮深、釀成今日之勢、第当密為防禦之。備憮順清河繕完、使可守。整兵治器、使可戦、下策也。」徐光啓撰《増訂徐文定公集》六巻首二巻、民国五一年台北中華書局用二二年上海徐家滙天主堂蔵書楼排印本景印、巻三、59 p.

21 「臣考万暦四十七年、奉旨訓練、遣使購求、而得西洋所進大砲四門者、今礼部右侍郎徐光啓也。天啓元年、建議従広東取到紅夷火砲二十三門者、南京太僕寺少卿、今丁憂服闋李之藻也。深明台銃事宣、賛画関門建台置銃者、今起陞兵部武選司員外郎孫元化也。天啓六年正月、寧遠守城殲賊一万七千余人、此正西洋所進四位中之第二位也。郤敵固圉、明效已見、及邇来東西騒動、而絶無講及于此者、則以用器之人不在故也。」瞿式耜撰《瞿式耜集》四巻、上海古籍出版社、一九八一、329 p. 巻一、「講求火器疏」33 p.

22 孫元化撰《西法神機》二巻、光緒二八年刊本

23 韓霖撰《慎守要録》九巻、海山仙館叢書所収

24 湯若望撰、焦勛述《火攻挈要》三巻《図》一巻、海山仙館叢書所収

25 「……東人戦法一一効、阿骨打等行事、死兵在前、鋭兵在後。死兵以重用双馬衝前、前雖死尽而後乃復前。莫有退者、退即後人殺之。有不敢不前、不得不前者。蓋其習俗使然与西北虜戦法不同。此必非我之弓矢決驟、所能抵敵也。」熊廷弼撰《熊襄愍公尺牘》四巻、光緒二一年黄岡洪良品京師刊本、巻四、二a「与兵刑両部」

26 「制敵定須火器。近得文学寳書謂、黄鍾梅欲效呂宋鋳大銅礮、一発可斃万人。……倘与工部商議買銅造得十数位、車運来遼城、無敵之神器也。」同、44b「与蘇石水太僕」

27 「誠欲揀歩兵練車営、以火器之長勝弓矢、以歩兵之長制虜騎、以土兵之長奪険阨、為漸逼漸進之計耳。」同、巻二、6b—7a「答高監軍道」

28 「敵復益兵攻、城内用西洋巨礮火砲火弾、与矢石、損傷城外士卒無算。」袁崇煥撰《袁督師遺集》三巻《附録》一巻、滄海叢書第一輯所収、巻一、14a

29 「……不知廷弼何面目入関耳。参看得経略態廷弼市奸、全無統衆禦悔之才、徒有報復凌人之気、内恃奥援、聞人言迭出、則眉目張天。外懼奴酋、聽胡馬驕嘶、則肝胆墮地。」沈国元撰《両朝従信録》三五巻、刊本、巻一、54a

30 同、巻一四、7b

31 「軍中之当籌尚多、而目下之吃緊有四。一曰、錦州不可不守也。……一曰、塔山不可不城也。……一曰、火器可不練也。与奴争于数歳之内、我之騎射不如奴。若擊奴于百歩之外、神器所至、奴之騎射、無所施其力矣。我之火器未嘗不精、火薬未嘗不多、要必使件件各尽其用、人人俱擅其能、則一器可以斃数奴、一人可以発数器、即用寡敵衆、当無不勝。況我之兵、且倍於奴無算哉。一曰、車営不可不備也。夫均此火器也。用以城守、則有余。用以進戦則不足者、無他、営墨不堅。無所拠以展其技也。可以堅我営墨、拒奴衝突者、莫如車。」同、巻三五、7ab

32 同、8a

33「国之大事以仁義為本、若望向来倡説邪教。堂堂中国、若用其小技以禦敵、豈不貽笑。」上曰、「火器是中国長技、若望比不得外夷。」宗周奏、「若望小技何益、成敗目今要慎選督撫。若文官不要銭、武官不怕死、何愁不太平。」李遜撰《三朝野記》七巻、荆駝逸史所収、巻七、32b

34「今上非他神宗之孫、光宗猶子、而大行皇帝之兄也。」呂毖撰《明朝小史》一八巻、景清初刊本、玄覧堂叢書所収、巻一八、2b「閣部史可法復燕京書」

35「本朝伝世十六、正統相承、自冠帯之族、継絶存亡、仁恩遐被。貴国昔在先朝、夙膺封号。載在盟府、寧不聞乎。今痛心本朝之難、駆除乱逆、可謂大義、復著春秋矣。昔契丹和宋、止歳輸以金繒、回訖助唐、不聞利其土地。況大国篤念世好、兵以義動、万代仰瞻、在此一挙。若乃乗我家難、窺我幅隕、為徳不卒、是以義始而以利終、為賊人所窃笑也。」同、4ab

36「二十日加鉄鎖三擁、入内朝。懋第喪冠白袍、不北面南向坐在廷下。摂政王心雅重之、欲生懋第且大用之、問在廷漢臣曰、卿等云何。吏部侍郎曰、為崇禎来可恕、為福王来不可饒。懋第曰、若言今上是先帝何人、且若中先朝会元、今日何面目在此、与我言乎。侍郎語塞。兵部右侍郎曰、先生何不知興廃。懋第曰、先生何不知廉恥心。於是在廷無復言者。摂政王曰、既為明臣、何為食我朝粟半年、而猶不死。懋第曰、爾入攘我朝之粟、反謂我食爾粟耶。且古之致力中原亦有藉外国之食者。我国家不幸罹此大変、聖子神孫豈遂無人、我今日止有一死又何多言。摂政王色変、揮出斬之。」張煌言撰《北征紀略》一巻、坿適園叢書第一集魯春秋、85b-86a

37「我寧全髪而死、必不去髪而生。従容就義非難事也。但今天下之勢、猶父母病危、雖無生理、為子者豈有先死而不顧者乎。」徐孚遠撰《交行摘稿》一巻、芸海珠塵革集所収、東海先生伝、18a

38「吾為孔孟之徒、豈能依釈氏偸生乎。頭断髪不可截也。」同右。

39「竟全髪痛憤、連嘔血数升而没。」同、17a

40「閏六月十五日、以江南既平、再下薙髪之令、諭懋第降且髡之。懋第不従、中軍副将艾大選首髡如法、且勧懋第降。懋

第大怒、揮従官立杖斃之。事聞十九日捕下刑部。刑部曰、若不早薙頭降、而擅自杖殺人何也。懋第曰、我頭可断、髪不可薙。我奉命北来、已辦一死、豈肯自敗於今日、与若輩為伍、且艾大選薙頭倡叛恨、不以軍法梟示通衢、我自行我法、殺我人与若何、与可速殺我。逐下獄。」《北征紀略》85ａｂ

41 「苟其流於海外諸島生禍福、以受蛮夷之血食、不可。曰為妖蛟霊鼉所得借爾気魄、以乱風雨、不可。」「兵火互触鬼満於煙。苟其馳逐青燐、乗怨毒之気、中於草木以害禽獣、不可。」周容撰《春酒堂文存》四巻《詩存》六巻附《外紀》一巻、四明叢書第一集所収、巻四、6ａｂ

42 「計予此薙已六且七矣。噫。」同、8ａ

43 「夫髪者心之苗也。心之苗在首為髪、而在腕則為文章。心有寸血久貯不鮮、当頻用之使推陳宿。故予好文章、頻削稿不倦、則髪応亦似之。」同、10ｂ

44 《大清世祖章皇帝実録》巻八二、2ａｂ　満州大学士甯完我は陳名夏を、薙髪・衣冠などの満州風俗に反対したと糾弾した。陳名夏事件については「弐臣論」東洋文化研究所紀要、68号で既述した。

第三章　異端思想

第七節　明末清初の異端論争

清代禁書が実際にリストアップされた十八世紀後半から見れば、禁書著者たちの思考は何らかの理由で当局によっ

て異端とみなされたものばかりである。しかし禁書著者の八割を占める十七世紀明末清初の文人たちは、百年もあとになって自分たちの考え方が一律に異端視されるとは予想しなかったであろう。著者たちは政治的混乱、異民族王朝成立という激動の中で生きる指針を求めて思索し、何が正しい道か、何が異端かについて激しい論争を行った。しかし自分が辿りついた結論については決して各自異端だと考える人はいなかった。明清交替期、当局は政治的混乱の対応に追われて思想対策にふみこむ余裕をもたなかったが、清代になってからは後年の乾隆禁書へ連なる前兆も見えはじめた。前朝・明代の文人を「軽学」「結党営私」の「異端」と批判し朱子学の権威を求める動きがそれにあたるが、「異端」を批判する官吏自身、前朝の文人社会に育った人が多くその思考も一様ではなかった。

私たちは本節で、禁書の中核部分をなす十七世紀の思想空間でいったい文人は何を正統なよりどころと考え、何を追放すべきと考えていたのか、あるいは思想的権威は政治的混沌と共に消失していたのか、為政者は思想状況をどのようにとらえていたのか、当時の論争の場に立ち戻って考えてみたい。

なお、「異端」という語は古代から使われ、正しい教えとは異なる別の一説という意味をもつが、その正しい教えについての定義は明らかでない。宋代になって聖人の教えに背く邪説という説明が定着したが、儒学以上の異教・異学・異説を指すことが多かった。陸九淵（象山、一一三九―九二）は儒学内の「異端」があることを認め、宋代儒学は二種類の「異端」――㈠儒学以外の諸教、㈡儒学内の邪説――の存在を認めるに至った。こうした考え方は明代（一三六八―一六四四）になっても「異端」の定義として通用したが、何が正しい教えか、何が邪説かは複雑であった。（「一七世紀における中国の異端」《比較思想研究》第8号、一九八一、において中国の「異端」は「正統」を対立概念としないこと、儒家側の異端追放失敗は、儒教の学問方法でカバーし切れない多くの分野が出現し、儒学内異

端や儒学以外の諸教をばねにした思考模索が表面化したことを既述した。）

ここでは宋代以降定着して明代に至った、前記の(一)(二)をともに「異端」の定義とみなして(a)著者たちの異端論争、(b)当局側の異端禁止、(c)トレランス　の順序で検討して行きたい。

(a)　著者たちの異端論争

禁書の中でもっとも頻繁にみられる異端攻撃は、儒家としての教養をもつ著者たちが儒学を正しい教えとし他の諸教を非難するものである。国学の位置にある儒学を必須の教養として育った知識人たちが他教に警戒を示すのは、明末清初に限ったことではなく中国思想の長い歴史において常に底流であり続けたことである。しかし十七世紀に儒学の危機意識が強いのは「嘉靖（一五二二―六六）隆慶（一五六七―七二）以後の学問は、士大夫が邪説に惑わされないものはいない」（呂留良《四書講義》③⑨）と指摘がでるほど儒学が内外からゆさぶられたからである。

明末清初の思想家で生涯清朝に仕官しなかった顧炎武（寧人、亭林、一六一三―八二、《亭林集》⑦、《亭林遺書》④、《日知録》⑥⑩の著者）や王夫之（薑斎、船山、一六一九―九二、《船山自定稿》⑥、《五十自定稿》⑥、《六十自定稿》⑥、《七十自定稿》⑥、《文堂戲墨》⑥、《船山鼓棹》⑥、《五言近体》⑥、《七言近体》⑥、《文堂緒論》⑥の著者）は、道仏二教を自己の利益のみを考える異端の教えであると批判する。《日知録》で顧炎武は言う、「南方の士大夫は晩年仏教を、北方の士大夫は道教を学びたがる者が多い。そもそも一生仕官し引退して暇を得たならば徳を積み修業して今までの欠点を補うべきであるのだが、知識が充分でないと異端に流れる。これは田地や家屋敷を求める輩と、やることは違っているけれども利に孜孜とする心は同じである。」(1)

古学復興をめざす張溥（前出）は《七録斎文集》の「左道論」では、為政者が二氏（道・仏）を慕うのは「本当の教えに務めない」ためで、その場合中国の政治が乱れ、邪しまな気がしのびこんではたらくのは論をまたないと述べる。「漢の武帝（在位B.C.一四〇―八八）、宋の真宋（在位九九八―一〇二二）は太平の世にあっては聡明な君主であった。ところが神仙を好み、封禅に志した。この二人の帝はどうして鼎湖（古代の伝説で黄帝が銅で鼎を鋳造し竜に乗って天に上ったという地名。河南省霊宝県の南、荆山の麓）の惑いや天書（神仙が書いたという書物や手紙）のでたらめを知らぬことがあろうか。ところが武帝の意向は遠く軽挙（外征か？）を興し、志は黄帝（不老長寿）にあったし、真宗は澶淵の盟（真宗が河北省のこの湖のほとりで遼と歳弊の約を結んだ）で恥をかき、天下に耀くことをしたいと思ったのにそのすべを得られなかった。そこで奸人がすきを窺って干渉し、しばしば事変がおこったのに悟らなかった。……君臣が深宮の中で密議を行い、朝廷で妄言する。これはみな利欲の心が勝って異端の道を求めるのに急ぐからである。」(2)

儒家の立場からみれば、上層部のみならず庶民もまた道仏二教及びその亜流である〝邪説〟に惑わされている。前節（第六節）でみたように夷狄対策において伝統的な内政重視を堅持した儒官劉宗周（前出）は「保民訓要」の中で民衆に対して禁止すべき項目としてまっさきに〝妖道〟と〝遊僧〟を挙げている。彼は民衆の守るべき綱目として、両親・長上を尊敬し同郷仲良く家業に励み、若者を教育し非行を防止するという、三綱五常に副った六項目を掲げている。万暦時代刑部侍郎となり、儒家としても人望のあった呂坤（叔簡、新吾、一五三六―一六一八）は《去偽斎文集》②⑫に収められた「憂危疏」の中で民衆が乱をおこしやすい四つのケースを挙げる。㈠無聊の民が飢寒に苦しみ寄るべない場合、㈡無職の民が血気盛んで法を無視し生命を軽じる時、或いは徒党を組んで巣窟に住み悪事をする

場合、㈢邪説の民が白蓮結社のように教主を中心に何万と集り、故郷を離れて移動する場合、㈣不軌の民が帝王になろうとして機を伺ってさわぎを起こす場合。呂坤は大官が不要不急の珍品に数百金を払う生活をしていた当時、一日苦しい労働をして「僅かに銀二分を得るのみ」の民が異端の教えにはしることを憂えたのである。

ところで一五八〇年代から南部沿岸地帯に布教をはじめ、その技術的知識によって前節でみた実務派官僚の支持を得たイエズス会派のカトリック（天主教）も、儒学の影響力低下をおそれ、その護持を主張する人々の立場からいえばおそるべき「夷教」であった。《蔣代敬日草》⑫の著者蔣徳璟（申葆、八公、一六四六、一六二二年進士）は、徐昌治（通昌、覲周、無依道人、武原居士、《昭代芳摹》⑧の著者）が一六三九年に編纂した《明朝破邪集》で次のように述べる。「近ごろわが家で家廟を新築し先祖を奉った。ところが西士（ヨーロッパ宣教師）がこれを見て予にいうには、『これはあなたの家の主だが、まさにさらに大きな主があるのです。公はそれを知っておられるか。』予は笑っていった、『大主とは上帝だ。わが中国ではただ天子だけが上帝を祀ることができ、他にそうしようとする者はない。わが儒の如きは性命の学で天を畏れ天を敬う。これ無くしては天ではないのだ。』」[3]　同書に収められた福建巡海道施邦曜（爾韜、四明、一五八五―一六四四）の告示（一六三七年十二月十六日）ははっきりと天主教を「左道惑衆」の教えときめつけて処罰の対象とする。「……本道は細かくその書（布教書）を閲覧したが、その大要は天主に従順なことを道を知るとし、天堂地獄を指針とする。人の世はみな唾棄し、ひとり天主だけを至尊とする。親が死んでも哭位の哀をしないし、親を葬っても追善の節を修めない。これは正に孟子のいう無父無君であり人道にして禽獣なる者である。……本院は沿海の各郡県に厳命し、この輩を留めることを許さぬ。十軒毎の印牌にその教えに従う者があると註記してあれば十軒が連座し、教えに従う者は〝左道惑衆〟の規律によって処罰する。」[4]六年後に

満夷に抵抗して明朝に殉死する施邦曜はこの時は「天主教夷人」を保甲制という水際作戦で撃退しようとしたのである。

このように仏教、道教、天主教、さらには民間信仰の「淫祠」、さらに「淫詞、小説、戯曲」といったものもさきに挙げた㈠儒教以外の異端として儒家の指弾を受けたが、こうした批判の対象となった人々もまた何ら動揺せず、まっこうから反論しているのが注目される。雲棲袾宏（仏慧、蓮池、一五三五―一六一五）は、《竹窓随筆》で「儒教と仏教とは傷つけあうものではなくてたすけあうものである。……国法の力がとどきかねる点をひそかにおぎなっているのは仏教である。……仏法の力がとどきかねる点を、あらわにおぎなっているのは、儒教である。」「儒教が仏教を排斥する場合に、その形式は似ていても、実質のちがうものがあるから、ひとまとめに問題としてはならない。儒者には三種ある。それは誠実な儒者と、偏見をもった儒者と、超俗的な儒者である。誠実な儒者は、もともと仏教に対してにくむ気持はない。ただその学問は、三綱五常といった人倫の道を中心とし、『格物致知誠意正心修身斉家治国天下』をめざしている。……偏見をもった儒者とは、常識はずれの独りよがりの素質をもち、……言いたい放題の悪態をついてそのまちがいに気づかない。……超俗的な儒者とは、その見識が精密で道理が明確であり、仏教を排斥しないばかりか深く信じている。深く信じるばかりか、実際に行なう。これを真儒というのである。」[5]（荒木見悟氏の訳文による）と、儒教との協同を提言し、かつ儒家を三つのランクに分け、真の儒家は仏教に帰依するはずだと自信をもって逆に評価の対象とする。また、《澹園集》③⑨、《献徵録》⑦、《明人物考》④、《状元策》⑦などを著わした焦竑（弱侯、澹園、一五四一―一六二〇）は、「友人ノ釈氏ヲ問フニ答フ」で次のように述べる。「程顥（明道）は、

其の心を尽すとは其の性を知るなり、と言った。仏教の『識心見性』とはこのことである。……〔儒家は仏家と自然に合致する〕この理を知らぬわけではない。しかるに必ず分けへだてして異をとなえるのは大へんなものだ。皆異端の名をやみくもに作ろうとしてその名を見失なっているのだ。」(6)

他方実務派・西学派の士人たちも天主教を熱心に擁護した。《慎守要録》（前出）の著者韓霖は《弁教論》（Cou. 7113　本稿冒頭一七七頁参照）で述べる、「おもうに教えはとくに〔人の本来の〕性を為し根本を設けることであり、ふたつはないのだ。だから造性の主（天主）でなくては性を正す教を設ける能力がないということがわかる。古えより聖賢はみな、性は天命を本としていると言っている。……邪風が起り異端が熾んとなり千蹊万径を設けてこれ（聖賢の正しい教え）を乱すのは、後儒が浅陋なのである。」(7) 徐光啓（前出）は「華夷共主」を唱え、何喬遠は（前出）は《西学凡》（Cou. 3379）の序（一六二六年）で「東海に聖人が出ればこの心この理は同じである。西海に聖人が出ればこの心この理は同じである。」(8) と述べていずれもマッテオ・リッチ（利瑪竇、Matteo Ricci 一五五二―一六一〇）らイエズス会士を擁護し、儒教と天主教が予盾しないことを陸九淵（象山）の言を借りて強調した。

儒家の教養をもちながら、他教に深い理解を示す禁書著者たちは、宋学以後の「後儒」「俗儒」に対して容赦ない批判を浴せる。社会的地位のある人々の公然とした異教支持は明末清初における思想界の大きな特色の一つであった。さらに儒家は異教攻撃にすべての力を注ぐわけにいかなかった。なぜなら儒学内の異端もまた強力に存在していたからである。

呂留良（荘生、晩村、一六二九―八三）は、すでに第二章五節で述べたように清朝の下で「蛮夷」を告発しその反満意識のために乾隆禁書では三十種以上の著書がリストアップされたが、生前の康熙時代には朱子学者として「儒教

内の異端」を攻撃した。《四書講義》③⑨、《呂用晦文集》③⑨で彼は言う、「およそ朱子と陸子には異同がないと謂う人、および王陽明が朱子と合致する所があると謂う人は皆異端の徒である。[9]」「およそ天下に道理を行い絶学をあきらかにし、しかも一つとして朱子〔の言うこと〕に合わないものは、辞を惜しまずこれを闢(ひら)くほかはない。おそらく〔こうした闢くべき説は〕一に王学だけのことではあるまいが、王学が最も顕著なのである」。「良知の学派は、異端の術をたのしみにして民意の欲する所を窺い、流派がさかんになって、かの〔儒家の〕かきねをこわす。聡明な向学の士は、かの〔良知の学の〕立説の高きを喜び、かの〔儒家の〕旧説の浅薄なのを悔いて、皆いっせいにこれに帰依する。隆慶（一五六七―七二）・万暦（一五七三―一六一九）以後、遂に朱注の学問に背を向けるのが当然といったありさまになった。[10]」「余はかつて近頃の良知の学はわけの分らない奇妙なことを説くと述べた。その欠陥が露われるに及び、総じて利欲と偽りの二つを脱していない。しかるに世間はなおかつその書を尊奉し、たまたまこれを批判する者があれば父母の名を聞いたかの如く耳を掩い、〔掩うのが〕遅れることを心配するのは何としたことか。ただこのように大〔千〕世界にたよるだけ〔の人々の間〕では、これまで真の程朱学派の学徒〔といえる人〕にひとりとして会ったためしがない[11]」。

「百本のむだなはりねずみの毛〔を逆立て〕、八面に敵を迎える」と評されていた呂留良は経書解釈の形式をとって縦横に陽明学批判を展開する。では異端はなぜ排除すべきなのか。呂留良は言う。「異端は心に悟ることもないし、つとめて行うこともない、また、〔異端でもって何かを〕成し遂げるには不十分である。異端は、君子、卿、士大夫を十分惑わせることはできない。但し悟る所、行う所が、聖人の、天にもとづく道でないならば、政務をそこなわず、民に害毒を与えないものはないのだ[12]」。異端は朱子学をきちんと会得している人にとっては影響力をもちえないが、

社会を乱し民衆に害毒を与えるというのが呂留良の異端排斥の理由である。この排斥理由は、「儒学外の異教」を儒家が攻撃するときに使うものと同じであった。

「致知格物」を重視し聖賢の学問を実現したいと考えていた王夫之（船山、一六一九―九二）もまた陽明学を警戒し、とくに「儒の立場に立ちながら仏学を義疏としてこれを世間内にとりこむ……無善無悪派」に対して、一瞬の悟りを求める「狂禅」の徒と呼びくり返し批判する（第一章第四節参照）。「姚江の学が出るにおよんで、もっともほしいまゝに聖人の言から〔自説に〕似たものを拈（つま）みとり、一字一句を摘（と）りだして〔自説の〕要抄とし、その禅宗に竄入させた。じつに無遠慮もはなはだしい」[13]。

《吉川幸次郎全集》16「銭謙益と清朝『経学』」によれば、銭謙益（受之、牧斎、一五八二―一六六四）は文学者としての立場から「経学」を諸学の基本として尊重し、自己の文学理論の根拠を儒家の古典の語に求めようとしていた。彼は明末に主観的な「経」解釈が横行し、「経」のテキストが偽造され、経典が侮蔑されていることを深く憂えていた。銭謙益は、明の儒学、とりわけ陽明学の恣意性を「俗学」の名の下に排斥した。「俗学はなぜ排斥されねばならぬか。それらは似て非なる儒学であり、無儒の状態よりもなおわるい」（吉川氏）からであった。

以上のような儒教内の異端に対する「朱子学」あるいは「経学」の立場からの批判は、しかしながら十七世紀の異端論争に結着をつけたとはいえない。なぜならその批判は陽明学の創始者陽明自身の思想を正面からとらえていなかったのである。経学者たちは陽明学者たちの「良知」は孟子のいう真の良知ではないと言いながら、陽明の良知の内容を批判することはなかった。「無善無悪」についても王畿（龍溪、一四九八―一五八二）、王艮（心斎、一四七三―一五四一）らが慧能（六三九―八九）、神秀（―七〇六）を模倣したのであって陽明自身は善悪の分別をしていたと

主張した。わずかに朱子学者呂留良が、陽明の朱子批判に反論した程度であった。

儒家の間での異端追求が明末清初の思想界で圧倒的な力を持ち得なかったのは、経学者たちの陽明学批判にもかかわらず文人たちは自分が望みさえすれば何のためらいもなく王守仁（陽明）への支持を表明できたからであった。左光斗（遺直、浮邱、一五七五―一六二五）魏大中（孔時、廓園、一五七五―一六二五）と並んで気節ある士として知られ、明清両朝下で十一回推されながら官位につかなかった孫奇逢（啓泰、鍾元、夏峯、一五八四―一六七五）は、《夏峯先生集》③⑦⑨⑫に収録された「子ニ示ス」という七言絶句で「家学をさかのぼれば二百年、老子を論ぜず禅を論ぜず」と、道仏とは無縁の儒学者の家柄に生まれたことを強調するが、儒学については朱熹と王守仁を並列して違和感をもたないのである。「魏蓮陸ニ与フ」で孫奇逢は述べる、「われらは今日ほんとうに〔自らが〕紫陽（朱子）となり陽明となろうとするのであって、これ（真実）を朱子、陽明に求めるのではない。各々が自分の心、自分の本性からありったけの精神を奮い起し各人のその時々の境遇に応じて心おきなく満ち足りるようにすれば、まさに朱子と陽明に恥じることがない。〔この〕二人に恥じることがなければ、またどうして天地に慙(は)じることがあろう。どうして孔子に慙じることがあろうか」[14]。孫は嘉靖年間の陽明学者で修撰・春坊左賛善をつとめた羅洪先（達夫、念菴、一五〇四―六四）の《念菴集》に題辞を書く、「念菴は陽明の功臣で龍谿（王畿を指す、一四九八―一五八二）の良友である。陽明の良知の説は、孟子の『慮ラズシテ知ル』にもとづいている。龍谿は、ついに、『一念の霊明』は内外もないし〔煩悩をはなれる〕寂も感覚もないと考えた。われらはこの『一念の霊明』がわからぬ。すなわち致知か、あるいは良知によっても天下の変革を尽くすには不足である。必ず見聞と知識を加え補い稗益し、その発揮を助けるものこそほかならぬ俗学である。これこそ、『一念の〔霊〕明』を究極とし、『一覚の頃』を実際とすることなのだ」[15]。

孫奇逢は晩年朱子学に傾いて行ったと言われるが、この禁書に盛られた陽明への敬意は並々ならぬものがある。しかも彼は平然と自分を「腐儒」と呼び、大先輩の顧憲成（叔時、涇陽先生、一五五〇―一六一二）に「仏法」を聞き、「性は善なく善ならざるなし」の一語を得てあらゆる経典の奥義と讃嘆を惜しまない。のちに(c)で述べるように、孫奇逢は、儒教内の異端をものともしないどころか、「三教の聖人の法はおのおの治世に役立つ」と述べ、出世間の点では違っても互いに非難しあう必要はないと考えていた。また、王守仁（陽明）は軍事指揮において優れていたことから実務派官僚たちの尊敬も受けていた。徐光啓は一六二一年、勅命を受けて新兵を訓練中に「陽明先生ノ武経ヲ批スルノ序」を書き、明朝の中興の祖と賞し、「焦氏澹園続集序」でも陽明と焦竑の文をともに「兼長備美」（有益でしかも巧み）として讃えているのである。

私たちはこれまで「儒学内」の異端論争として朱子学派ないし経学者対陽明学派という形でのみ検討して来た。しかし「儒学内」で異端視されていたのは陽明学諸派だけであったろうか。私たちはここで儒学者対儒学者、個人対個人、学派対学派の対立論争から眼を転じて、禁書著者の生きていた時代――乾隆禁書が決定された時代ではなく――に、政治当局者はそもそもどのような思考を「異端」として警戒していたかをあわせてみておきたい。

(b)　当局側の異端禁止

十七世紀の「異端」は、これまで(a)でみたように多様な内包をもっている。それを反映して当局が禁燬の対象とした「異端」「邪説」も、時期により、また地方により、その対象領域は大きなくいちがいをみせている。いずれの場合もまず当局が非難するのは、儒家の教育を受けたのに「本業をおろそかにして異教の残りかすを宗とする」文人に

対してである。支配層としての心得を欠く文人への制裁として当局側が投獄、受験資格の取り消し、さらに異端取締りの任務を怠る官吏を処罰すると警告する場合もあった。(16)

もっとも、当局あるいは当局寄りの思想政策を掲載した官刻本や経学家の著書のうち明代に刊行された本はたとえ聖賢の教えをひろめ異端を追求する目的で書かれていても、それ以前の第一目的が、国内をたてなおし、富国強兵を実現し、満州族をはじめとする「夷狄」を押し返すことであったから「夷」「奴」「虜」などの「違礙字句」を含んでおり、乾隆禁書の際には、しばしば禁書の扱いをうけた。

それとは逆に、清代に入ってからの政府側の異端禁止は、これを収録した官刻本が清朝により禁燬せられることはありえない。したがって私たちは今日「九通」や「地方志」等により、削除や伏字の全くない原文を見ることができるのである。ところで清朝に入ったばかりの時期に、漢人知識人の思考が「異端」かどうかをチェックしたり、「異端」追放の政策を立案したりするのは、曽っての「夷狄」で、しかも言語も教養も異なる満人には未だ不可能なことであった（そうであればこそ、清初には後に禁書となる本が大量に出版され得たのである）。そのため、清初には立場こそ違え「異端」統制の側にある士大夫も、「異端論争」に加わり後にその著作がおしなべて禁燬せられる禁書著者たちも、ひとしく漢人であり、激動の王朝交替期をつぶさに経験し「夷狄」による「中華」の支配確立という信じがたい屈辱を「薙髪令」と共にわが身に刻みこんだ同胞なのであった。なかには、「異端」を取り締る高官と、「異端」の元凶と目される文人とが同郷同窓であったり、取り締る側が取り締られる側の弟子筋にあたることもめずらしくなかった。このような状況の下で、いったい清初のオーソドックスな思想とはいかなる路線上にあったのか、《皇朝経世文編》によって、その巻六八、六九（礼政・正俗）を参照しながら考えてみたい。

同書巻六八に収められた「邪説ヲ禁ズルノ示」を公布した湯斌（孔伯、荆峴、潛庵、文正、一六二七―一六八七）は前述の禁書著者孫奇逢に弟子入りした儒学者である。湯は康熙帝の下で翰林院、明史編修などを歴任した後、一六八四年江蘇巡撫となった。彼は師の孫奇逢が傾倒した陽明学を直接攻撃することはなかったが、孔子以来の儒学の伝統を守りたいと考えていた。「為政は人心を正すことよりも優先するものはないし、人心を正すには学術を正すことよりも優先するものはない。朝廷（清朝）は儒学を崇め、道を重んじ、〔武力によらず〕文治を公明に行う。経術を世に広くほめあらわし、邪説をやめさせる。儒教の道は日中の天のよう〔に明らか〕だ」[17]。ところが彼の任地である江蘇はどういう状態にあるか。民間の本屋は利益をあげるために通俗小説、伝奇小説、絵草紙など青少年を堕落させる淫蕩な気分を蔓延させる。「風俗は恥づかしめられ、正を救う手だてがない。」そこで湯斌は出版統制を命じる、「出版業者らに文書でことごとく知らしめよ、十三経二十一史および性理通鑑綱目等の書籍〔はむろん良いがそれら〕以外には、宋元明以来の大儒が注釈した経学の書ならびに理学・経済・文集・語録などのうちで印刷公刊されていないか或いは板木がこわされてなくなったようなものは原型どおりにあらためて翻刻せしめよ。所信、狂妄、後世〔を扱った図書〕を軽易に増刷して、古人の著述の意図を失わせてはならない。今は政治を公明に、学を正しくすべき時である。これらの書が遠くにも近くにも出版されてこれを購入する者は多く、その行いは広まって久しい。なんじらは利益を計り、またまさにこれを出版したのであろう。もしも古書のうち深奥かつ通俗でないもの、或いは老成醇謹の士に請うて古今の忠孝廉節、仁を敦くし譲を尚び、実事善悪感応、凜然として畏るべき者を選び取り編集して醒世訓俗の書となせばそれだけで愚蒙な者を教化教導することができ、心身の在り方を点検することができるというならば禁止しない。もし依然として淫詞小説戯曲を編集刊刻し、人心を壊乱して風俗を頽廃させるならば、人が証拠によ

り訴え出れば板木は直ちに禁燬することを約束し、その編集者、印刷者、発売者は一律に重責に処す[18]」。ここでは「異端」という言葉は使われていないが湯斌が儒学の経典を、それも信用あるテキストで流布させようと考えていたことが分る。明末の巷間に作られた経書の評点本は、無責任有害な思考を知識人に蔓延させるものだという態度を湯斌は崩さない。さらに、人気の高い小説、戯曲、絵草紙の類いを彼は全て禁じようとするのである。邪説を禁じる指令は、江蘇巡撫が通達を出したからといってすぐに実施されはしなかったが、ここにはすでに後の乾隆禁書に通じる権力側の意向があらわれている。私たちは、朝廷においては順治時代からすでに漢人高官が発言の自由を奪われ、満人皇帝に対して薙髪や満人習俗に反対する旨の上奏を行った場合には大臣であっても命にかかわることを見たが（「武臣論」東洋文化研究所紀要68参照）、出版活動の制限についても、湯斌の活躍した時期よりも早く清朝当局は官僚予備軍たる生員に向ける形で言及している。

《皇朝文献通考》巻六九、学校考によれば一六五一年（順治八年）、まだ南部諸地方で反満運動が頻発している頃に都察院は次のような通達を出している。「生員は聚（あつ）まって結社、糾党、騒動を起したり、濫りに文選、草稿を版刻してはならない[19]」。翌五二年、各省の儒学明倫堂への碑文を通達した中に再度いう、「生員は志を立てて学び忠臣・清官となるべきである。書・史に記載されている忠臣・清官の事蹟を互いに講究するように究め、すべて国を利した民を愛す事をいっそう心に留めるべきである。生員は心を忠厚・正直におき、読書はまさに実用をもつものとし、出仕しては必ず良吏となるべきだ。心術・邪刻の読書は、必ず成就することがない。……生員は党を糾合し多数の者で盟を立て結社をつくり、官府を一手ににぎってはならぬし、許可なく地方劇や芝居のせりふをみだりに印刷・刊行してはならない。違反者は提調官（取り調べ責任者）に聴問させ罪に服させる。……提調教官は生員に儒学を学習するこ

とを課し、ならびに町の商人が淫詞・瑣語を刊刻するのを厳禁する責任がある」[20]。いずれも読書人が結社をつくって政治力をもつことを厳しく禁止し、また自由な出版活動が思想に影響することを警戒している。礼部が公認した読本とは、四書、五経、性理大全、資治通鑑、大学衍義、歴代名臣奏議等であった。町なかの書店で刊行できるのは理学、政治、有益な文章の諸書だけに止まり、その他の「瑣語・淫詞」は流通厳禁となった。結社と読書活動への制約はこの後もたびたび政府から通達が出されており、一六五五年（順治十二年）には礼部への上諭が士大夫の子弟は経学・道徳・経済・典故の諸書を学び真の儒家となり良い官吏となるよう命じている。一六六〇年（順治十七年）には、浙江省海寧出身の礼科給事中楊雍建（自西、以斎、一六二七―一七〇四）が「植党・訂盟之禁」を厳格にするよう上奏し、結社が役所をわがものにして公事に介入する悪習を摘発すべしと申し入れている。

読書人に対する言論・出版の規制と並行して儒学以外の思想や信仰に対する締め付けも清初に行われている。「邪説ヲ禁ズルノ示」を出した湯斌（前出）は「淫祠ヲ毀スノ疏」を書き、上諭を受けた形で江南の蘇州・松江の民間信仰を摘発している。「蘇州府城から西に十里のところに楞伽山があり俗名を上方山といい五通（「淫祠」の神の名称の一つ）が居すわっています。何百年来、遠近の人がかけつけて牲えをささげ酒醴の餐宴をひらきます。歌舞、笙簧の音声、昼夜喧騒で、男女が雑踏します」[21]。天主教に対しては、すでに楊光先事件（一六六四―六九）後、上諭により、布教のパンフレット配布や集会、教会の建立（特に直隷諸省における）の禁止が布告されている（「東洋文化」第六号の「気――中西思想交流の一争点――」で既述）が、十七世紀末になると「異端」「邪教」の観点から外来のキリスト教に対する非難が強まってくる。浙江省上杭出身の邱嘉穂（秀端、一六九〇年挙人、広東省帰善県の知県）は「天主教論」の中で道仏二教を批判した後に「泰西天主一教」は中国をたぶらかす異端だと述べ、「天堂地獄之説」は

仏教の輪廻説から取ったものであるし、「身後の福利」（死後の永福）も漠然としてよく分らないと批判する。しかもその影響力は数十年後に衆人をあつめ隙に乗じて社会を乱す可能性があると述べて禁止を求めている。こうした地方官の反キリスト教的発言のあと、直隷省で天主堂を天后宮などに変える命令が下されるのである。(22)

(c) トレランス

私たちは明末清初の異端論争として、一部の禁書著者たちが異教や儒学内の異端を排斥し、それに対してまた他の一部の禁書著者たちが各自の信奉する教えや学問を強く支持して憚らないのをみた。他方、政府側は明末の混乱期をのぞいて一貫して経学、正史の重要性を主張し、勝手な解釈を付けたテキストも認めないという姿勢をとってきた。

こうした対立・論争の実例から見ると、十七世紀は「異端」をめぐって強硬な攻撃をくり返していた時代のような印象を与える。だが十七世紀の思想界では、書物に書かれた文人の思想が実際に「禁燬」せられる場合はきわめて少なく、むしろ十八世紀・十九世紀よりは自由・奔放な発言ができたのである。十七世紀の禁書著者たちは少くとも文集や手紙類に自己の信じる教えを記すことができたのである。

《頼古堂尺牘新鈔》③⑫は「頼古堂」なる書室をもち、明朝の下で御史となり清朝に入ってからも福建布政使、左副都御史を歴任した周亮工（元亮、櫟園、一六一二―七二）と友人たちの交信を収録したものである。交信が掲載された文人の数は同書のうち「二選蔵弇集」だけですでに二七〇名に達し、朱子学者、陽明学者、文学家、仏僧、明朝忠臣、弐臣、無官の文人、多数の禁書著者を含む。この多彩な交友それ自体がすでに周亮工の、さまざまな思想に理解を示す寛やかな精神を示しているが、ここに収められた手紙も、明末清初の知識人の率直な心情、生活人としての

感懐を反映していて興味深いドキュメントになっている。たとえば巻二にある安致遠（静子、《蘭雪堂集》①⑫の著者）は、「劉生ニ与フ」で述べる、「異端とは、天が異端を生んだのだ。聖人とは、天が聖人を生んだのだ。釈迦は胎内から脱けでると、すぐに堂に下りて七歩歩き、涅槃堂に上って中で偈を説いた。老聃（老子）は、生れると白髪で話がうまかった。もしわが先師（孔子）の言葉や歩きっぷりが普通の人とちがわず、七十歳余りで死んだというのなら、一人の普通の人がおしまいになったにすぎない。何かちがう所があるか」[23]。天が生れさせた以上、異端の人も聖人も本質的な違いはない。仏教や道教のように「異端」と呼ばれてもその創始者のエピソードはなお人々に語り継がれる。史話を好み、歴史中の人物になり切る癖のある安致遠は、「天の生じた」「聖人」たる儒学の先哲に、却って魅力の乏しいことを率直に認める。同じく同書に書簡が収録された魏裔介（石生、貞庵、崑林、文毅、一六一六―八六）は、清初の高官（礼部尚書、大学士）の中では満人皇帝の漢官弾圧を受けなかった珍しい人物である。（「弐臣論」東洋文化研究紀要68、第三章、満人王朝の弐臣処遇、で順治年間はまだ禁書は起っていないが朝廷での発言は制限されていたことを述べた。）彼は湯斌（前出）と同じく朱子学の権威回復につとめ、本書の中でも「四書五経、通鑑綱目、性理大全に聖人の道が備わっている」と説き、「聖賢之書」を読んでも役立てないで仏教に傾倒する人があるのを、「程子はこれを淫声美色に比べている、正に人が惑溺しやすいからだ」と書いたように生えぬきの儒家である。だが彼は同時に「異端」についても毛嫌いするのでなく、よく勉強することを提言する。「人ニ与フ」の冒頭で彼は言う、「禅学もやはり検分しないといけない。検分しないとあるいは禅学の高邁さ精妙さがわが儒学を凌ぐところがあるのでは、と疑うかもしれない。検分した後に、その高邁さには実地が伴わず、その精妙さとは、わが儒学のいわゆる精妙さではないということが分る」[24]。この一文には編者の傍註があり、「検分した者は、その雲霧の中に堕ち、検

分しなければなおのことその雲霧の中に堕ちる。〔魏裔介〕先生が互いに督励しあうようこれを心配されたわけなのだ」[25]。と禅学の影響の大きさを認めている。こうして「異端」の存在を認めながらも経学を主張した魏裔介は、しかし別の側面をもっていた。彼は清初の漢人高官の龔鼎孳（孝升、芝麓、端毅、一六一六―七三、定山堂集③⑨⑩、過嶺詞⑦の著者）、胡世安（処静、菊潭、秀巌老史、一五九三―一六六三）、王崇簡（敬哉、宗伯、一六〇二―七八）、薛所蘊（子展、行屋、―一六六七）たちと共にドイツ人宣教師アダン・シャル（湯若望、前出）の七十才の祝いに集り「道未湯先生七秩寿序」ほかの詩文を贈った。なかでも都察左都御史の要職にあった魏裔介は「おもうに先生（シャル）は西海の儒でいらっしゃるが中華の大儒といってもよいだろう」と賞讃し、シャルの教えは「仏老縦横消遙之説」から中華を救い、「窮理」「尊天」の正しい道に復帰させると言い切るのである。[26]

このように明末の清初の士人がさして儒学にこだわらずさまざまな思想や信仰に支持を表明する例は禁書著者にも多く見出すことができる。無惨な刑死後「彼が生きていれば」とその軍事才能を朱健（《古今治平略》③⑦⑨⑫）、曹学佺（石倉、忠節、一五七四―一六四六、《曹学佺詩文集》⑨、《石倉全集》①、《石倉詩稿》①、《遼東名勝記》⑩）たちによって惜しまれた袁崇煥（元素、―一六三〇）は、北辺の戦陣で多くの部下を亡くし、その「游魂」が、生前帰りたがっていた故郷に戻りうるのか、死ぬとき抱いていた志を表わしうるのか、考えあぐねた空しい気持を「上人」に懺悔し、仏教に傾く心境を詩文に残した。《袁督師遺集》の中に収められた「訶林寺ヲ過ギテ口占ス（口ずさむ）」は、

四十年来過半身　　四十年このかた半生をすごし、
望中祇樹隔紅塵　　はるか望めば祇遠精舎の樹林は浮世を隔つ、

如今着足空王地　　いま仏の地に足をつけてみると、
多了従前学殺人　　前よりふえたのは殺人をおぼえたこと。

袁崇煥の職務がしだいに彼を仏教へいざなって行ったことをよく示している。[27]

明朝に殉じた呉麟徵（聖生、忠節、一五九三―一六四四）は王朝末期の社会不安――米価高騰、民衆の掠奪、殺人・強盗に対する地方官の無力、人心の退廃など――を経験しつつ袁崇煥とは逆に信仰の無力を《呉忠節公遺集》⑩⑫に記している。「里中では米価は一両六分になり、外の郡邑では二両する。外はいたる所蠢動している。私はまさにさかまく渦の底にいる。仏はどうして氷に落ちるのを救えるだろうか。羅漢はただ慚悶し大息するのみだ」。[28]

先に陽明学への支持で知られた孫奇逢は、「わが儒は経世を本業と為しており二氏（道仏）の長所を兼ね収めることができる。二氏は出世間を心と為しており、自らわが儒と合併して用を為すことはできない」[29]と述べながら元代（一二六〇―一三六七）に創立された古刹宝蔵寺の補修（毀れた仏像の修理、屋根の葺ぎなど）のための募金運動を行っている、孫奇逢はどのような考え方や信仰にもそれぞれの長所があり奥儀があると認め、極めて寛容な態度を貫いた。その著《夏峯先生集》には、さきに(b)当局側の異端禁止において、当局側の漢官として登場した魏裔介が一六七七年（康熙十六年）「伝」を寄せ、「〔孫奇逢〕公の学問は慎独を宗となし天理を体認することを要となす」と讃えているが、孫奇逢は固苦しい儒学の型にとらわれることなくのびのびと境地を開いていったのである。

十七世紀後半から次第に清朝によって疎まれていく天主教――宣教師のもつ技術だけは満人王朝によって巧みにとりこまれるが――に対しても多くの士人たちがあたたかい扱いをした。カトリックの教理内容にまで興味をもって調べる文人は少数であったが明末清初にかけて何千部という天主教紹介書を中国で漢訳出版できたのは、多くの士人た

ちの協力のたまものであった。明末にはヨーロッパ人の武器、暦法に関心をもつ実務派・西学派が新来の技術を明朝の命脈を救う切り札にする見返りにイエズス会士の布教を認めたといえようがそれにしても天主教関係出版物に、翻訳、序跋、印行協力など今日文献に残る協力を行った禁書著者は、明代では徐光啓ほか前節にみた西学派士人をはじめ、馮応京（可大、慕岡、恭節一五五五―一六〇六、《明経世実用編》③⑨、《実用編》⑦の撰者。艾儒略（Julio Aleni）撰《五十言余》Cou. 6758 に序を寄せる）沈一貫（肩吾、竜江、一五三一―一六一五、《喙鳴軒詩集》③⑨、《台館鴻章》⑥⑪、《翰林館課》⑨⑩の撰者。艾儒略撰《張弥格爾遺蹟》Cou. 1016 に序）、蘇茂相（弘家、石水、一五九二年進士、《撫浙疏草》⑤の著者。《唐景教碑頌正詮》の著者）、黄景昉（太稺、東厓、一五九六―一六六二、《甌安館詩集》③⑦⑨の撰者。艾儒略《三山論学紀》Cou. 7120-7131 に序）たちがおり、清代でも周亮工（前出、《建福州天主堂碑記》に記名、教会建立推進）、龔鼎孳（孝升、芝麓、端毅、一六一六―七三、《定山堂集》③⑨⑩、《過嶺詩》⑦の撰者。湯若望（Adam Schall）撰《主制羣徴》に贈言）、王鐸（覚斯、文安、―一六五二、《擬山園集》③⑨の撰者、《主制羣徴》に贈言）ほか多くの高官・文人をかぞえることができる。

禁書著者の生きている時代は、中国思想史の中でまれに見る思想の自由、トレランスの時代であった。社会的な動乱の中でそれを享受した人々の思考ははたしてどのようなパターンをもっていたであろうか。私たちは次節で禁書著者たちの思考様式の特徴をみることにしたい。

1　南方士大夫、晩年多好学仏、北方士大夫、晩年多好学僊。夫一生任宦、投老得閒、正宜進徴修業、以補従之闕、而知不能及、流於異端。其與求田問舎之輩、行事難殊、而孳孳為利之心、則一而已。」顧炎武撰《日知録》三二巻、康熙三四年序

呉江潘氏遂初堂刊本、巻一三、「士大夫晩年之学」、33a

2「漢之武帝、宋之真宗、当太平之世、為聡明之主、而好神仙、志封禅。此二帝者、豈不知鼎湖之惑、天書之妄哉。然武帝之意、遥興軽挙、志存乎黄帝、而真宗之耻在澶淵之盟、思有以耀天下、而不得其術、于是奸人窺其間、而亟有以中之、則数変而不悟。……君臣私議於深宮之中、而妄言於朝堂之上、此皆利欲之心勝、而求異之路亟也。《七録斎文集》、前出、論略、巻一、44ab

3「比吾築家廟奉先、而西士見過謂予、此君家主当更有大主、公知之乎。予笑謂大主則上帝也。吾中国惟天子得祀上帝、余無敢干者。若吾儒性命之学、則畏天敬天、無之非天」。《明朝破邪集》八巻、崇禎十二年序刊本、巻三、1ab

4「……本道細閲其書、大概以遵従天主為見道、以天堂地獄為指帰。人世皆其唾棄、独有天主為至尊。親死不事哭泣之哀、親葬不修追遠之節。此正孟子所謂無父無君而禽獣者也。……本院厳飭沿海各郡県、不許容留此輩。於十家牌内註明有従其教者、十家連座、従教者、処以左道惑衆之律。」同、巻二、32a—33b

5「儒与仏、不相病而相資。……是陰助王化之所不及者、仏也。……是顕助仏法之所不及者、儒也。」(儒仏交非)「儒者闢仏、有迹相似而実不同者。儒有三。有誠実之儒、有偏僻之儒、有超脱之儒。誠実儒者、於仏原無悪心。但其学以綱常倫理為主、所務在於格致誠正修斉治平。……偏僻儒者、禀狂高之性、……窮毀極詆、而不知其為非。……超俗儒者、識精而理明、不惟不闢、而且深信。不惟深信、而且力行。是之謂真儒也。」(儒者闢仏)袾宏撰《竹窓随筆》、明徳出版社

6 焦竑「答友人問釈氏」黄宗羲撰《明儒学案》六二巻、乾隆四年序刊本、巻三五、24b—25a

7「蓋教特為性設本原無二也。因知非造性之主、無能設正性之教。自古聖覧皆言性本天命。……邪風起、異端熾、設為千蹊万径、以乱之、後儒浅陋。」段炯、韓霖撰《弁教論》一巻、Cou. 7113「人性」

8「東海有聖人出焉、此心此理同也。西海有聖人出焉、此心此理同也」艾儒略(Julio Aleni)撰《西学凡》一巻、Cou. 3379「鏡山逸叟何喬遠序」2ab

9「凡謂朱陸無異同、及陽明之於朱子有合一処者、皆異端之徒」呂留良撰、陳鎏輯、《吊晩邨先生四書講義》四三巻、清刊

本、巻三二、6b

10 「凡天下辨理道闡絶学、而一不合於朱子者、不惜辞而闢之耳。蓋不独一王学也。王学其尤著者爾。」呂留良撰、呂為景輯《呂用晦文集》八巻《続集》四巻《附録》一巻、光緒三四年上海国学保存会排印本、国粋叢書第一集、附録、4b「良知家挾異端之術、窺墓情之所欲、流起而決其籬藩。聡明向上之士、喜其立説之高、而自悔其旧説之陋、無不翕然帰之。隆万以後、遂以背攻朱註為事。」同、巻五、17b

11 「余嘗謂近世良知之学説玄説妙、及其敗露、総不脱利仮二字。然世且尊奉其書、偶有指摘之者、則如聞父母之名掩耳。唯恐不速、何也。只縁偖大世界、不曽見箇真程朱之徒。」《呂晩頓先生四書講義》、巻三〇、7b

12 「異端無心無力行、亦不足以成、異端不足以惑君卿士大夫。但所得所行非聖人本天之道、未有不害政事、毒生民者也。」同、巻三二、11b

13 「至姚江之学出、更横拈人之近似者、摘一句一字以為要妙、竄入其禅宗、尤為無忌憚之至。」王夫之撰《俟解》一巻、船山遺書所収、15b

14 「我輩今日要真実為紫陽、為陽明、非求之紫陽・陽明也。各従自心自性上、打起全付精神、随各人之時勢身分、做得満足無遺憾、方無愧紫陽与陽明、無愧二子又何慙於天地、何慙於孔子乎。」孫奇逢撰《夏峯先生集》十四巻、畿輔叢書初編彙刻類孫夏峯遺書所収、巻二、二五a

15 「念菴陽明功臣、竜谿益友也。陽明良知之説、本之孟子不慮、而知竜谿遂以為一念霊明、無内外無寂感。吾人不昧此一念霊明、便是致知或以良知不足以尽、天下之変必加見聞知識、補益而助発之、便是俗学、此以一念之明為極、則一覚之頃為実際也。」同、巻五、5a

16 馮応京輯、戴任校《皇明経世実用編》二八巻、民国五六年台北成文出版用万暦三二年序刊本景印、巻二八、正学疏 ならびに《欽定大清会典》八〇巻《事例》九二〇巻《図》一三二巻、嘉慶二三年敕撰、刊本、巻一三二、吏部、処分例参照。

17 「為政莫先於正人心。正人心莫先於正学術。朝廷崇儒重道文治、修明表章経術、罷黜邪説、斯道如日中天。」《皇朝経世

文編》、巻六八、61a

18 「仰書坊人等知悉、除十三経二十一史及性理通鑑綱目等外、如宋元明以来大儒注解経学之書、及理学経済文集語録、未経刊板、或板籍燬失者、照依原式另行翻刻。不得所信狂妄後生、軽易増刪、致失古人著述意旨。今当修明正学之時、此等書出遠近購之者衆、其行広而且久。爾等計利、亦当出此。若曰古書深奥難以通俗、或請老成醇謹之士、選取古今忠孝廉節敦仁、尚讓実事善悪感応凜可畏者、編為醒世訓俗之書、既可化遵愚蒙、又足検点身心、在所不禁。若仍前編刻淫詞小説戲曲、壊乱人心傷敗風俗者、許人拠実出首、将書板立行禁燬、其編次者、刊刻者、発売者一併重責。」同、61ab

19 「生員不許聚結社糾党生事、及濫刻選文草稿」《皇朝文献通考》巻六九、学校考七、6b

20 「生員立志当学、為忠臣清官、書史所載忠清事蹟、務須互相講究、凡利国愛民之事、更宜留心。生員居心忠厚正直、読書方有実用、出仕必作良吏、心術邪刻、読書必無成就。……生員不許糾党多人立盟結社、把持官府、武断郷曲所作文字、不許妄行刊刻、違者聴提調官治罪。……責成提調教官、課習生儒、并厳禁坊賈刊刻淫詞瑣語。」同、巻六九、8a—9b

21 「蘇州府城西十里、有楞伽山俗名上方山、為五通所踞。幾数百年遠近之人、奔走如鶩、牲牢酒醴之餐、歌舞笙貴之声、昼夜喧闐男女雑遝。」《皇朝経世文編》、前出、巻六八、34b

22 同、巻六九、礼政、正俗下、19a—26a「天主教論」「改天主堂為天后宮碑記」なお、《四庫全書提要》では万暦以来の士大夫が心学に影響され、邪説の流行を招いたとし、「西学」をはっきり「異端」と定めている。

23 「異端是天生異端、聖人是天生聖人。釈迦脱胎、即下堂走七歩、上涅盤堂中説偈、老聃生而白頭能言。若我先師語言行歩与常人無異、活到七十多歳便死、只是完成一介平常人而已。有何異哉。」周在浚等輯《頼古堂尺牘新鈔二選蔵弆集》十六巻、道光十九年北平雷氏重刊本、巻二、12b—13a

24 「禅学亦不可不看、不看或疑其高遠精妙、有過於吾儒処、看後則知其高遠者、未有実地其精妙者、非吾儒之所謂精妙也。」同、1a

25 「看過者墮其雲霧中、不看更墮其雲霧中、先生所以偲偲慮之也。」同右

26 湯若望（Adam Schall von Bell）撰《主制羣徴》二巻、一九一九年影印本、贈言附、3a

27 《袁督師遺集》、前出、巻三、22b

28 「里中米価至一両六、外郡邑有二両。外者到処蠭動、弟正如旋渦底、仏安能救落水、羅漢惟有慚悶大息而已。」呉麟徴撰《呉忠節公遺集》二巻、乾坤正気集所収、巻二、9b

29 「吾儒以経世為業、可以兼収二氏之長、二氏以出世為心、自不能合并吾儒為用。」《夏峯先生集》、前出、巻七、42b

第八節　著者たちの思考様式

第一章で禁書内容の特色を検討した際、私たちは多数の禁書著書が「致用」の精神を重んじ、明朝下では富国強兵の「用」、清朝になってからは各自の能力を生かす「用」を求めたこと（第二節　致用主義）、歴史を、中華文明存続の証明として書き続けたこと（第三節　史学重視）、学問方法としての認識、ならびに生身の人間としての存在をつらぬく「気」は著者たちの生きる活力であり続けたこと（第四節　存在と認識）の三点を掲げた。

むろんこうした特色が「乾隆禁書」だけの特色であったとはいえない。禁燬されなかった書籍の中には右の特色の一部ないし全部を備えているケースもあるからである。またこれらが前節（第三章第七節）で言及した「異端」論争の引金になったと早急に判断することもできない。なぜならこれらの特色は、「異端」論争にまきこまれずむしろ当局側寄りの思想政策を打ち出していた儒官たち（たとえば前節の湯斌、魏裔介ら）までもが共有していたといえる場合があるからである（たとえば魏裔介と同僚弐臣たちの思想環境の近さを考えた場合）。等しく明末清初に生きなが

ら禁書著者と〝非〟禁書著者の思考を分かつものはなにか、あるいは両者に共通する基盤はなにか、こうした問題は今後別稿で十七世紀の時代精神を総合的に検討していく過程でより明らかになると思われる。

現在ここで言えることは、禁書内容の三つの特色とは、書かれた時点で「異端」批判を受けようと受けまいと、後の乾隆時代（一七三六―九六）になってまぎれもなく「異端」と判定された書籍の、その主たる動向を表わしているという点である。私たちは第一章で指摘された三つの特色が、禁書著者たちの関心をひきつけるテーマであり続けたのは、著者たちのどのような思考形式に基いていたのかをこの節で考えてみたい。

(イ)致用の内容

私たちは明末、満州族や国内峰起の脅威が増し明軍の敗戦が続いた時期に「致用」を求める実用主義が士大夫たちの間に浸透し、有効な軍事対策が模索されたことをみた。都市失陥や敗戦という衝撃は明朝の人々に強い危機意識を与え、時を同じくして声高になった「致用」のスローガンに正面から反対する人はいなかったのである。だが、この「致用」（実効を挙げる）とは、いったい軍事と結びついて明末の禁書著者たちの心をとらえ広がっていったのであろうか。あるいはもっと広い分野を対象に使われたタームだろうか。禁書著者にとっての「致用」とは、どのような内容をもっていたかを考えてみよう。

第一章第二節、第二章第六節でも述べたようにテクノクラートの西学派士人として、「西洋火器」の「用を尽す」ことが「醜虜」「奴」を凌ぐ唯一の策と主張し続けた徐光啓は、《徐文定公集》に収録された「同文算指ヲ刻スノ序」で「算数之学」が「近世数百年の間、特に廃せられた」理由として、第一に儒学者が天下の実事をないがしろにした

こと、第二に、妖術を使う者が数には神の理があるといつわって数学をまことの学問から遊離させてしまったことだとする。[1]「算術は職工の斧と尺度であり」、さらに「象数の学は、大は暦法、律呂となる。その他の形質あるものや、度数にかかわる事で、用いるのに〔象数の学に〕頼らないものはないし、これを活用すれば巧妙さを尽さないものはない」[2]（「泰西水法序」）。徐光啓が、「格物窮理」の一分野をなすと考える数学は「器」のはたらき、「器」の使い道のすべてに必要な学問である。その「器」は武器や天文儀器だけではなく、人々の暮らしに必要なあらゆる道具を含む。彼は右の引用文に続いて次のように中華の実状を率直に認めている。「昔、利先生（マッテオ・リッチ、利瑪竇、Matteo Ricci　一五五二―一六一〇）と旅したとき〔先生は〕私に向ってこういわれた。『〔私が〕質素に旅した国々は何十何百を数えますが、〔私の〕見たところ中国の国土は、土地、人々、声名、礼楽、ほんとうに四海に冠たるものです。しかるにその民は見るとたいてい貧乏で、いったん水害・干魃にあえば路上に餓死者が出るし国の財政も枯渇するのは何としたことでしょう。……〔私の〕聞いている水法（水力学）の一件は、象数のたぐいです、（水力学の）文言は伝え、器は写生してもよいぐらいで、なお将来〔中国に〕ひろめ得るならば国を富ませ民に役立つでしょう。あるいはまた歳月がその効果を現してくれます。……』[3]」徐光啓は、人間は生活が安定してこそ「仁義」がともなうというのは東西に通じる人間共通の真理だと考える。徳目だけでは社会を救う力とはなりえないのである。同じ「泰西水法序」で彼は《泰西水法》の著者マッテオ・リッチ（利瑪竇）に向って話す。「先聖の言葉に次のものがあります、『備物致用、立チテ器ト成リ、以テ天下ノ利ト為ス、聖人ヨリ大ナルハ莫シ』。器は形而下のものではありますが、世の中の用にぜひ必要なのです。このことは詳しく理解されていないだけなのです」[4]。

真に世の中に役立つ学問を願い、彼は「西学」を次々に紹介する。「測量法義ニ題ス」では「その術を広め、これ

（測量法）によって治水治田の巨利を為し、急務を為すのだ[5]。と述べ、「幾何原本雑議」には「人が上等の素質をもっていて考えのすじ道があらっぽいならばその上等の素質は役に立たない。中位の人材でも思考が緻密ならば中位の人材は有用である。幾何学に通じることができれば、〔思考は〕きわめて緻密になるだろう[6]」。アダン・シャル（湯若望、Adam Schall）の星図に付した「赤道南北両総星図叙」や、イエズス会派カトリックの布教書《二十五言》に寄せた跋文「二十五言ニ跋ス」でも、さらには西学とは直接関係ないが当時多数の中国人を飢饉から救ったさつまいもの普及をすすめる「甘藷疏序」でも、その論調はひたすら世に役立つ「有用之学」を求める徐光啓の願いを表わしている。徐光啓は同時代の士大夫が、古代の学者や政治家の有していた「度数」の知識や「民生に稗益する」という目的をすっかり失ってしまったことを批判する。「往昔の聖人の、どのようにして世を制し用に利するかという大法は、かってこれを士大夫の間に得ることはできなかった。そこで技術の業や政治の事はことごとく古代にはるかにひけをとることになってしまった[7]」。

徐光啓の翻訳した《幾何原本》を読んだ金声（子駿、正希、太史、一五九八―一六四五）は、《金太史集》⑤⑦に収められた「徐元扈相公ニ上ス」で「実学」への讃辞を寄せる。「……〔私・金〕声は、路を思うこと本来粗略迂濶ですが西儒に敬服しています。その実学を嗜（たしな）んでいる〔分野という〕のは、理道および修行・法律にあります。しかし象数に至ってはまだ全く通じておりません。即ち太老師（徐光啓を指す）の訳された《幾何原本》の一冊は、幾度も解読して必ず終えたいと思います。この本は曽て巻を完えたことがなくいつもまた迷い悩んだ上でやめてしまいます。況（いわ）んや暦法は深く浩いのに〔私の〕浅く狭い知識で対応するのは、まさに簀（もっこ）を編んで山を移し、葉を巻いて海を竭（く）もうとするようなもので、これこそ不可能なことです[8]」。金声は徐光啓から一六三三年「修暦」に推薦されるほど

暦法への興味と知識をもっていた、同時に彼は「京営副総兵」の経験から明軍の弱体化を痛感していたのである。徐光啓と協力して「西洋暦法」の導入に努めた李之藻（振之、我存、一五六五―一六三三）はフルタド（Franciscus Furtado 傅汎際、一五八七―一六五三）に協力して出版した《名理探》の中で、アリストテレス論理学をも「致用之学」として位置付ける。「名理学（論理学）は明悟（明らかに悟ること）のはたらきを指導する。『致用』といえるのはまさにこういうわけなのだ」[9]。

本節でこれまで見たように「致用」は、決して「火器」の実効を求める軍事的な要求だけからでなく、幅広い分野の「実学」を求める禁書著者たちの要請だったといえる。第一章第二節で私たちは《易》の繫辞伝の句「備物致用、立チテ器ト成リ、以テ天下ノ利ト為ス」を、軍事用の設備を行う時のスローガンとして紹介したが、実際には、致用派の士人たちが、生活のあらゆる面で改革や新しい技術の導入を行おうとする際にひきあいに出すスローガンだったといってよい。橋本敬造氏は、徐光啓が西洋天文学を中国にとりいれる際、伝統との対立を避け「人民の利益になるという功利的観点から暦法修正を正当付け」[10]たといわれるが、天文学だけでなく「実学」すべての分野で保守派との対立を避ける配慮を徐光啓や彼の仲間の西学派士人たちはとっていた。その端的な表われが、誰もが古典として文句のつけようのない、孔子が編纂したといわれる《易》からの引用文であり、その中にある「致用」というタームは、従来の儒学の教養にひたったままで新しい動向や実学の思想に反対する保守派をも封じこめる力をもっていたのである。

致用主義がどのような場合に説かれ、保守派の反対をおさえる狙いがあったのか、私たちはそれを徐光啓の愛弟子で軍事のエキスパートであった王徵（良甫、葵心、端節、一五七一―一六四四）の《遠西奇器図説》にある問答の中

にみることができる。王徴は「民生日用」及び「国家の工作」に必要なヨーロッパの機器類を図解した上で言う。「私に好意ある客が訪ねてきて言った。『あなたが《西儒耳目資》の刊行に力をかしたのは、まだしも文人学士が廃止しない行為だといえるでしょう。〔けれども〕今ここに収録してあるのは職工の技芸のたぐいばかりです。『君子ハ器ナラズ』といいます。あなたはどうしてこれを破るのですか。また、西儒はわが中華に住み我々は〔彼らと〕親交があり、もとよりその賢明さはよく知っています。ただ、その人となりは万里はなれた荒服の地に居た西鄙の一儒者にすぎないではありませんか。どうしてこれほどひいきなさるのですか。』私は答えた、『学問とはもともと精粗を問わずみな世の人をたすけることをめざすものです。また中華か西洋かを問わずみな天にそむかぬことをめざすものです。ここに収録したのは技芸末稍に属すとはいえ実際に民生日用に有益です。国家の振興は火急を告げています。もし『器ナラズ』の説にこだわって軽蔑するとしたら孔子はどうして《易》繫辞伝でこうも言われたのでしょう。『備物致用、立チテ器ト成リ以テ天下ノ利ト為ス、聖人ヨリ大ナルハ莫シ』と」[11]。王徴のこの序文から私たちは明末においても、文人士大夫たるものが胥吏・職人の実技や、外国人の奇技小器にたずさわってはならないという中国の学者の通念が、実学をめざす致用派・技術派の人々の前に厚い壁として立ちはだかっていたことを知るのである。そしてまた、こうした固定観念をもつ文人が、「君子不器」という《論語》（為政篇）の句を使い、本来、立派な人は一つの用を足すだけの人物ではなく何の用にも応用がきくことを説いたこの文章の、孔子の真意をまげて文人士大夫は形而下の器を扱う実技には手をかさないはずだと軽蔑するのに対して、技術・実用の必要をとくエキスパート達は、相手の土俵におりて行って《易》（繫辞伝）の「備物致用、立成器、以為天下利。」をくり返し引用して「致用」主義が古典の権威に裏付けられていることを強調する必要があったこともこの序文から理解できるのである。「致用」を重視する徐

光啓や王徴たちの立場からは、じっさい社会のリーダー格であるはずの士大夫がたいていは勉強不足でしかも「夜郎自大」におちいっていることがまんできなかったのである。李之藻は「学者之病」として次の四点を指摘した。一、「浅学自奢」（学問が浅薄なのに自分で買いかぶる）二、「怠情廃学」（怠情で勉学をやめる）三、「党所錮習」（党派にこり固まる）四、「悪聞勝己」（見聞を嫌って私見を勝れたものとみなす）。[12] 李之藻は同時代の文人たちに、勉学へのひたむきさ、視野の広さが欠けていることを率直に認めた上、党争によるエネルギーの浪費を指摘している。禁書著者の中には、いっぽうでは東林党や復社などの文人が冤罪で奄党に殺されたことを憤る作品（たとえば、汪有典《史外》③⑦⑨⑫、張溥《七録斎集》③⑨⑫など）を残した人も多かったが、他方では、「致用」を唱える技術派官僚たちのように「士大夫の精神と才能を消耗させ、国計民生に何のかかわりもない」[13]（徐光啓）党派抗争や朝廷での権力争いにうんざりしていた人も少くなく、この人たちの作品には党争で死んだ文人をめんめんと嘆く場面はでてこないのである。

ところで、朝廷の大官たちが迫りくる明朝の最後をよそに儒学の経典に基いて皇帝に行政の心構えを説き、社会の上層部にいる多くの士大夫が経典の註解や詩文集の執筆、刊行に余念がない時、なぜ一部の士大夫は実学の必要性にめざめ、「致用」の観点から学問をとらえようとしたのだろうか。先ず私たちは、明末の守備力の低下と為政者の無策を告げる一つの例を見ておこう。史玄撰《旧京遺事》③⑫には彼自身の見聞が生き生きと報告されている。「だいたい首都の兵の定員は二十五万位、神機（大砲）等三営で戦う兵である、選抜されたものは出征に備え、その他の守兵は数は多いものの、かってその優劣を区別したことはない、ただ緊急事に遇うと名を呼ばれて城内に入り警邏し、分れてひろく営をつくったり、或いは営にとまる。宮城の夜の警防では諸所に禁令を出して、城中の防禦に備える者

は此より出てはならぬという。ところがおおむねいいかげんに書類を作ってうわべをごまかすことはまるで演劇のようだ。戊寅（一六三八年）のように、敵衆（満州族）が侵入した時西安門に拠って作った兵営は経費を惜しんだので役所の前はただ一枚のブルーの幕が張ってあるだけ。周囲には刀・杖が数十点あるが将兵はどこにいるかわからず、がらんとして冷たく無人であった[14]。「さらに余が見るところ、夜警の官兵は平時は数十軒ごとに一隊とするが隊の人数は幾人かわからない、だいたい緊急時には増えて五十人位になる。夜は初更（午後七時から九時頃）には鈴を提げて号令をかけるのがあちこちで聞こえる。夜警軍が到着して点検すると、一ケ所で大声で唱える、その他の隊も次々に唱和し、歌のようだ。たくさん降りた霜がむせび泣き〔するほど夜が更けて寒くなり〕、軍の指揮官が行ってしまうと、これ以後はいびきをかいて眠り、声はしない。ずっと明け方まで眠り辰の時刻（午前七時から九時）になるとまた鈴をならして号令を一度かける。官庁街を馬が通るようになると巡警した者は解散する。軍政がこんなありさまでどうして民衆を律することができようか[15]」。史玄（弱翁）は明朝の命運が、満州族が一時的にせよ首都に侵入した一六三八年から、坂をころがるように尽きていくことを見抜いていた。朝廷内に亀裂が入り、住民には豚一頭を城内に運んで来るだけでも税が課せられ、新年を迎える街からは灯りが消えた。さらに追い打ちをかけるように、首都を守るはずの弾薬庫は次々に爆発し多数の人命を奪った。人々は火星の運行がおかしいためであるとか、スパイがゲリラ戦で地雷をつかって火をつけたとか噂がとびかったが史玄は硝石と硫黄で作った火薬をせまい穴に入れてこれを油麦（そばの一種で油に富む）に押しつけると出火することは実験ずみであると冷静に記している[16]。このような市民の不安をよそに役人は何をしていたか。「政府当局は職務を大切にせず、安定した居所にいて俳優を尊び宴会の音楽に遊んでいる。……崇禎中には党派の人がおおいに羽振りがよかった。縉紳の賢者は派閥に意を用いて役所の仕事はか

たわらにほうり出し、鶏鳴の辰の時から馬に乗って街に出、あくせく求めて道路を塞ぎ、空が明るくなろうとすると客が門に到着し、一日中送迎して夜に及ぶ。その上賭博勝負の会があれば酒杯が飛び交い、なみなみとついだ酒をのんで正体を失い、職務で上奏しても万事、思慮がない」[17]。このように上層部が、庶民から遊離し、「実学」が幻になっても史玄は言う。「人の道は近く、天の道は遠い。私は必ず実の跡を取って近き者のために書くだけだ」[18]。

「致用」はたしかに富国強兵をめざす側面をもつが、たとえ国が衰え亡びてもその精神は民あるかぎり、人の役に立つかぎり受け継がねば、と考えた人々もいた。清代もすでに康熙年間（一六六二―一七二二）に入り、「遺民之志」をもつ文人は山野に隠れて暮すほかなかった時にも「窮理之学」を致用、実業の学として推進しようとした人々がいた。方中履著《古今釈義》⑥⑫にはその肉声が収められている。同書の校閲に参加した呉雲（舫翁）は言う、「上古の人は必ずしも書を著わさず、その能力を勲功と業績に著わしてみせた。すなわち勲功と業績によって著述をしたのである。後世になると人の才能を尽く用いることができず、やむを得ず、元気さを洩らす所もなく、これを書に托すようになった。……聖人の道は博い。私が文によって考えると、晋儒の清談は老荘があるだけで、老荘以外のことについては学問がないのである。唐儒は詩詞があるにとどまる。詩詞以外に学問がない。宋儒は静的かつ端正だが語録があるにとどまり、語録以外は学問がない。〔これらの儒家たちは〕天下の事、天下の理はひじょうに多方面であることを知らないのだ。儒者が理を窮めないならば、儒者はいかなる人間に属すというのだ。そもそも書を著わしたり書を伝えるというのは、いずれも世におおいに功績があるからなのだ」[19]。同じく、一六七九年に序文を寄せた仲中道（位白）は述べる、「実学とは何か、内には性命、外には経済、これをいうのである。典礼制度の学あり、象数・律暦の学あり、音韻・文字の学あり、医薬・物理の学あり、およそ身心・家国に役立つものは全部これを実学という

のだ」[20]。私たちは十七世紀の学問観がこのように広い展望をもちえた底流には「用」の精神が脈々と波打っていたと考える。禁書著者たちがこの視点から従来の学問を省りみた時、彼ら自身の必須の教養であった儒学、とりわけ宋学があまり高い評価を得ていないということは注目に値する。オーソドックスな儒学のこうした地盤沈下が背景にあったからこそ、第七節でみた多くの異端論争が可能であったし、また禁書著者たちの間にもさまざまな「異端思想」を受け入れる人々が続出したと考えることができよう。

(ロ)　歴史に対する著者の思考

第一章第三節で私たちの見た、史学重視の特色とは、歴史を残すことが漢民族の文化的アイデンティティ（同一性）の証明になるという点であった。したがってそれは過去の歴史を重視するというよりも現在の自分の眼にやきつく人間の姿、人間の考えだし作りだした事象を正しく記録して将来の歴史として残す、とりわけ現在の文化の水準を将来に示す、という立場から史学が重視されたのであった。漢民族王朝の滅亡にかかわるいわゆる「遺史」に属するものは言うに及ばず、漢民族の文化遺産たりうるものの記録すべてがそのために動員され保存されたのである。

しかし、激動の中に生き、なおかつ民族王朝の命脈を祈る多くの著者たちが歴史を考える時、「史」とはこのような静的な、一種の文化財としてとらえられたであろうか。さきに私たちは、第六節で儒家たちの「華夷論」が対敵である夷狄の分析から出てきたのではなく、古代の聖王の内政充実を手本としてしばしば説かれたことをみたが、歴史において禁書著者たちが中国の過去の歴史を現在に生かすという動向が起りえたであろうか。そもそも著者たちは過去の「史」を読み、未来の「史」となるべき記録を執筆しようとした時、どのようなディスシプリンを己れに課した

のであろうか。著者たちの「歴史」のとらえ方を、かれらの作品の中からさぐってみよう。

遼東経略として悲運をになって奮戦した熊廷弼（前出）は、のちに《熊襄愍公尺牘》に収められる、戦場から彼が役所や知人に送った手紙の中で、中国が過去異民族にどのように敗れた歴史をもつかをくり返し述べている。「高監軍道ニ答フ」で火器に熟練した兵の養成を強調した後、熊はモンゴル人が宋を攻略した故事を引く、「昔、蒙古は襄陽、樊陽を狙いました。劉整が阿朮に語っていうには、『わが精鋭兵が騎馬で突撃すれば当たるをさいわい薙ぎ倒しますが、水中戦だけは宋にかないません。あちらのお株を奪って、戦艦を建造し、水師を習練させてしまえば事は済みます。』そこで五千艘を造って毎日水師を訓練しました。雨で出られないときも陸地で練習しました。熟練した兵士は七万人、ついに襄陽を破って川に沿って直下し宋は亡んだのです。……今日、戦車が進むのは、舟の往来ほどに困難ではありませんがわが方の劉整、阿朮となる者は誰でしょうか。」[21] 兵器も大切だが、それを使いこなせる人間の育成はもっと大切だという考え方を熊廷弼はモンゴル人の中華攻略をめざした猛訓練を例に引いて述べているのである。熊は再び高監軍道に宛てて書く。「敵に李永芳（一六二一―一六三四、明の撫順遊撃だったが清に降伏して入関前の清の総兵官になった）らがいるのは、金の郭薬師、元の劉整・呂文煥たちのようです。」明側の地理、軍備は裏切り者李永芳のために全部満人に知られてしまい、それに対して明軍には相手のことが分らぬまま、灯ひとつないまっくらな場所にいるのと同じだ、――熊はここでも元・金という異民族王朝成立の蔭にいた漢奸を、明軍を裏切った武官と重ね合わせているのである。明朝でも検討された「用夷攻夷」（外人部隊で外夷を防ぐ）の提言に対しても熊廷弼は宋代の歴史から考える。「宋の時に交趾（北ベトナム）が出兵して討伐を助けたいと願い出ました。……歩兵五万、騎兵一千を応援に行かせるということでしたがそれはほんとうのことではありませんでした。それに、兵を外

にかりて内冠を除くというのはわが方の利とはなりません。」[22] 当時ベトナムが助太刀したいといってもこちらは受けなかった。ましてや現在自ら助け舟を出していない西虜を出兵させては中華が四夷に笑われよう。熊廷弼は、このように歴史を自分の軍事方針に絶えず参考にし、明軍の危機に投影させているのである。そこには実戦に勝つための手びきとしての歴史のみがあり、現在の漢文化を記録に止めるという意識はみられない。

歴史は現代をよりよく生きるための糧であると考えていた禁書著者はほかにも少なくない。孫奇逢は「論史二則」で歴史を書く側の心得を書く。孫はまず修史は良い著者を得る事が大切だと説く。学問文章がきちんとできても歴史のことを知らない者は参画できない。なぜなら「国は滅ぶことがあっても史は滅ぶことができない」からである。では学問文章がよく、歴史を知っていればよい史書が書けるだろうか。孫奇逢は、執筆者が「公」であるか「私」であるかが大切だという。史は私心をもって書いても無駄である。人がほんとうのことを言っているかうそをついているかは「天地鬼神」が実際によく見ている。《春秋》は二千二百年以前に書かれたが未だ生命を保っているのがその証拠だと孫奇逢は述べるのである。歴史が、史学に精通した人によって公正な視野の下に書かれた場合、それはいかに古い時期のものであっても現在の世界に蘇える。そうして人々はこの歴史の中に、自分たちの進むべき道を発見する。歴史が直接現在に連なっている時代を扱っている場合も同じである。禁書の中には、十七世紀当時にとっては現代史そのものといえる歴史が多い。朱健撰《古今治平略》③⑦⑨⑫、方孔炤《全辺略記》③⑨、王在晋《遼事実録》③⑨などは、とくにわかに強大となった満州族（女直）の歴史を調べ、明朝とそれとの関わりを史実を追って述べている。こうした清朝前史の出現は、急テンポで展開する事態に対応するための歴史が必要だったからと考えることができよう。清代になって漢人文化の記録を残すための歴史、異民族支配をストレートに批判する代り故事に托して批判

するための史書が多くなったのに比べ、明末における現代史は、中華のかじ取り、王朝の生き残りを必死に求める人々の「工具」であった側面が強いのである。禁書著者にとって、歴史は「時空」に縛られた記載であるにもかかわらず、もっとも「時空」を超えて生き続けるいわばバイブルのような存在であった。著者たちはそこから汲めどもつきない人間の生き方、考え方、国の曲り方の原型を学んだと同時に、自らも史家のすぐれた眼をもってバイブルの製作の一部に加わろうとしたのであった。

(八) 「気」の役割

禁書著者たちにとって「気」はどのような場面に出てくる基底的存在であったろうか。(十七世紀中国における「気」の位置付けについては、「『気』——中西思想交流の一争点」東洋文化第六七号所収、第三章に既述した。)「気」はなによりも自然現象を説明するタームである。《建州考》⑥の著者呉継仕(公信)は、《四書引経図考》において季節、音律、方位、時刻、さらに人間の気質までも、ただ一つの「気」で貫かれていることを同心円を描いて強調する。方履中の《古今釈疑》(前出)もまた、「気」が地中から昇ってきて季節の到来を告べると述べ《続漢書》の頃からある「候気」の儀式を信じている。風雨、雷、霜、地雷、地震などの天然現象、味覚、病気など人の知覚や生理現象も自然界の「気」が人体に入りこんで作用したものである。新しい技術が「西学」とともに中国に入ってきた十七世紀、禁書著者たちはひたすら「気」をもちいての解説に追われた。金属の精練(孫元化《西法神機》)、火薬の爆発(宋応星《天工開物》)、火薬原料の失火原因(李遜之《旧京遺事》)、水力学(徐光啓《徐文定公集》)、これらは「気」を適用して中国人に説明が行われた。同様に入ってきた「天主教」についても、賛否はともかく士人たちは概念検討を余

儀なくされた。上帝概念や魂魄（黄宗羲《破邪論》）、地球は円く九万里という西士の発言をめぐり、認識論における「不可知」とはなにかについて（王夫之《思問録》）、いずれも「気」を用いての議論が行われた。

天地万物が一気によって貫かれているのであれば人間の「気質」もまた各々が享けた「気」によってほぼ決定される。呉継仕によれば、「気」が清く澄むか、不純物が混っているかで聖人、桀や紂といった暴君になるかが決まる。人間の死後「鬼」（ゆうれい）になった「気」が活躍することもある。張潮（山来、心斎）の《昭代叢書》⑪⑫に収められている「幽夢影」という文章によると天下で最も富裕なのは鬼である。生前は無一文で死後何でもわが物にするからだという。

清代禁書に特徴的な「気」の適用は、国家の命運を左右することであった。戦いの気、乱をおこす気、指導者たちの奇怪な「気」、国を傾けるような災害・内乱の「気」。これらは自然現象とも人間の精神活動ともつかないあいまいな、しかし中華の衰亡を招く恐ろしい「気」として禁書の中に登場する。国の為政者もまた、国力の物理的なバロメーターである軍備や糧食などと同じようにこの「気」の動きを注目していたように思われる。呉麟徵撰《呉忠節公遺集》⑩には、一六二二年（天啓二年）の会試策が収録されており、その第三問は次のようである「天下の治は多いが、未だ清明強幹の気にもとづかなかったものはない。天下の乱は多いが、未だ穢濁糜爛の気にもとづかなかったものはない。」それに対して、呉麟徵（聖生、一五九三―一六四四）の解答は「清明強幹の気は日月が照りかがやき、風霆がはげしく轟くように、これを鼓ち、これを揺さぶり、こうして治を積むのである。穢濁糜爛の気は濃い霧が乱れ湧き、ふかい露がおおうように、浸し、これを淫し、こうして乱を積むのである。」[23] 続いて呉麟徵は、天下が治まるには法と清廉が揃って行われねばならぬ、廉をおいて法を求めるのはそもそも車の心棒がぬけているのに車で行こうと

するものだ。しかも法を行おうとする時は必ず為政者たる大臣が廉でなくてはならない。天下には貪官汚吏が多く紀綱が懐滅状態なのは、法がほんとうは不法になっているからだ。大臣自らが廉で無欲に国のため努力しなければ民はついて来ないと述べている。呉麟徵の解答は現実を直視し天啓年間の官界を鋭くついているが、設問が国家の運命を「気」に托しているのは、この後明朝滅亡までの政府の無策ぶりを考えあわせる時きわめて象徴的に思われる。「兵は敗れ気は復さない」「辺患は日一日とひどくなり辺備は日一日と弛み、人心は日一日と潰滅する」、こうした無力感は一六三八年以後とくに甚だしくなっていったが、戦いの勝敗や国運を「気」と結びつける考え方が首脳部にあるかぎり、「致用」が不徹底に終るのは眼に見えていた。一六二〇年代はまだ充分に「人才」（人材）もあり、戦勝のチャンスも多かっただけに、「気」が先に明朝政府の思考をある程度縛っていたのは惜しまれる。禁書の著者たちの思考も「気」を破りすてることは決してなく、合理的傾向をもっていた実務派官僚さえ、自然―人―国と連なる「気」の融通性、柔構造の中に自己を埋没させていったのである。

1　徐光啓撰《増訂徐文定公集》六巻首二巻、民国五一年台北中華書局景印本、巻一、「刻同文算指序」23 p.

2　「……象数之学、大者為暦法、為律呂。至其他有形有質之物、有度有数之事、無不頼以為用、用之無不盡巧極妙者。」同右、「泰西水法序」20 p.

3　「昔与利先生游、嘗為我言、『薄游数十百国、所見中土土地人民、声名礼楽、実海内冠冕、而其民顧多貧乏、一遇水旱、則有道殣、国計亦詘焉者、何也。……有所聞水法一事、象数之流也、可以言伝器写、倘得布在将作、即富国足民、或且歳月見効。』」同、20―21 p.

4　「先聖有言、『備物致用、立成器以為天下利、莫大乎聖人。』器雖形下、而切世用、茲事体不細己。」同、21 p.

5 「……広其術而以之治水治田之為利鉅、為務急也。」同右、「題測量法義」26 p.

6 「人具上資而意理疎莽、即上資無用、人具中材而心思縝密、即中材有用。能通幾何之学、縝密甚矣。」徐光啓撰《徐光啓集》一二巻、上海古籍出版社、一九八四年、巻二、「幾何原本雑議」76—77 p.

7 「……往昔聖人所以制世利用之大法、曽不能得之士大夫間、而術業政事、盡遜於古初遠矣。」《徐文定公集》、前出、巻一、「刻同文算指序」23 p.

8 「声　思路本粗莽疎濶、敬服西儒、嗜其実学乃在理道及修行法律、至于象数、全所未諳。即太老師所訳幾何原本一書、幾番解読必欲終集、曽不竟巻、輪復迷悶又行掩眞。況歴法淵浩、対以浅思狭識、将若編貫移山、巻葉竭海、此其所不能也。」金声撰《金太史集》九巻、乾坤正気集所収、巻三、11ab

9 「名理学導制明悟之用、正所以致於用也。」傅汎際訳義、李之藻達辞、《名理探》五巻、巻之一、16a

10 吉田忠編《東アジアの科学》、勁草書房、一九八二、317 p. 第六章、278 p.

11 「客有愛余者、顧而言曰、吾子嚮刻西儒耳目資、猶可謂文人学士所不廃也。今茲所録特工匠技芸流耳。君子不器。子何敝敝焉於斯。矧西儒寓我中華、我輩深交固真知其賢矣。第其人越在遐荒万里外、不過西鄙一儒焉耳。奚為偏嗜篤好之若此。余応之曰、学原不問精麤、総期有済於世人。亦不問中西、総期不違於天。茲所録者雖属技芸末務、而実有益於民生日用、国家興作、甚急也。儻執不器之説而鄙之、則尼父繫易胡以又云、備物致用、立成器以為天下利、莫大乎聖人……。」《遠西奇器図説録最》　天啓七年序刊本、序8b—9b

12 《西学凡》(Cou. 3379) 許胥臣、西学凡引、1b—2a

13 《徐光啓集》　巻十、474 p.

14 「大抵京師額兵凡二十五万、神機等三営戦兵也。挑選備出征、其余守兵数雖多、曽莫辨其優劣。惟遇警則呼名上城邏守、分汎結営或宿営、宮城防警夜禁諸所云、備禦城中者無出於此、然率潦草具文敷演如戯。如戊寅敵衆入、據西安門結営、惜薪司前惟張一青布幕、四周有刀杖数十件、兵将不知在何処、蕭蕭瑟瑟冷無人也。」史玄撰《旧京遺事》一巻、筆記小説大

観所収、7ab

15 「又余所見巡夜官兵、平時隔数十家為一隊、隊人数不知多少、大約有警増至五十人而止。夜初更提鈴唱号彼此相聞、値巡夜軍至察点、一処唱声、余隊便伝唱属和如歌、繁霜哽哽咽咽、及軍主過去、自此便鼾睡無声、一眠到暁、達辰復鈴唱号一遍、官街走馬而巡警者散矣。軍政如此、何以律衆。」同右、7b

16 同、8a

17 「……官方不以曹務為事、處安居尊優游宴楽、……崇禎中党人大起、縉紳之賢講求門戸而曹司之務旁委尽廃、鳴雞之辰騎馬出街、営求塞路、天将明則有客到門、送迎尽日及夜、又有呼盧闘彩之会、飛觴引満耗竭神情、雖職司章奏、無慮万端。……」同、6b

18 「人道邇、天道遠。我取其必実之跡、為邇者書而已」同、8a

19 「上古之人不必著書、以其能著見于功業、即以功業為著述、後世不能盡用人才、致不得已鬱勃無所洩而托之于書。」方中履撰《古今釈義》十八巻、康熙二一年安成楊氏刊本青閣蔵板、呉序、4ab

20 「実学者何。内而性命、外而経済、有典礼制度之学、有象数律暦之学、有音韻六書之学、有医薬物理之学、凡有資于身心家国者、挙而謂之実学。」同右、仲序、1b—2a

21 「昔蒙古図襄樊、劉整語阿朮曰、我精兵突騎所当輒破、唯水戦不如宋耳。奪彼所長造戦艦、習水軍、則事済矣。乃造船五千艘、日練水軍、雖雨不能出為昼地為船、而習之練卒七万、遂破襄陽、沿江直下、而宋遂亡。……今車歩非有難于舟楫也、而為我之劉整阿朮者何人哉。」《熊襄愍公尺牘》、前出、巻二、7ab

22 「宋時交趾願出兵与助討……将歩兵五万、騎一千赴援、非其情実、且假兵于外、以除内寇、非我利也。」同、巻三、18a

23 「天下之治不一、未有不本於清明強幹之気也。天下之乱不一、未有不本于穢濁糜爛之気也。」「清明強幹之気、如日月之照赫風霆之轟烈、鼓之盪之而積治。穢濁糜爛之気、如濃陰之昏騰、重露之曀曖、浸之淫之而積乱。」呉麟徵撰《呉忠節公遺集》二巻、乾坤正気集所収、巻一、壬戌会試策、第三問、3a

第九節　思想史に占める禁書の位置（仮の結び）

禁書の世界は、明末清初の文人たちの、たたかいと挫折を記録した世界である。著者たちはひとしく漢民族のエリートとして儒学と文学を基底の素養として育ってきた人々である。明朝が十四世紀に成立してほぼ三百年、士人たちはその文化遺産を受け継ぎ、王朝の安泰を信じて中国社会の支配層であり続けた。ところがそのエリートであったはずの禁書著者たちは、経済的にも文化的にも相手にならないとみていた「夷狄」や国内の「不頼」が、武力だけをたのみとして「聖朝」に反旗をひるがえし、あまつさえ新しい政権を樹ててしまうという信じがたい局面に立ちあうべくこの世に生を享けたのであった。官位の威力は無効となり、平和時ならば知らなかったであろうような飢寒、掠奪、殺人、戦火といった極限状態を庶民と共に経験したのである。「奴騎」（満人騎兵）は狼のように突入し、反乱軍はそりかえり、私兵は金次第で動いた明末清初、「殺人」は、先に殺すことだけを決め、誰を殺すかはあとから決めるという光景が珍しくなくなった頃、禁書著者たちの執筆態度は飾りを捨てたリアルなものになって行った。著者の中で、呉応箕のように庶民に近い貧苦にある者は、重税に苦しむ農民を描く。自身の生活を省みて学問や修養に打ち込める状態ではないと友人に語る金鉉のような人もいる。彼は、妻や母とも別々に暮らし自炊する羽目になり、静かに坐って読書することができないと嘆く。こうした生活感あふれる文人の記録がある一方で富を享受する大官の姿もある。宋犖は、琥珀色の豊醇な和蘭酒（オランダ）をのむ魏裔介や深紅の綿を五百金で買おうとした王崇簡の生活を描く。このように禁書著者たちが自分の言葉で、率直に語らないではおれぬ不安定な環境におかれた時、かれらの表現形式は、従来の文

人のパターンを破るものがでてきた。インタビュー方式、手紙、パンフレット、討論記録など、散逸しやすいが当局の眼にもふれないため自由に意見が交換できる抄本や小冊子が至る所で発行された。

とらわれない表現は、とらわれない知性の象徴でもあった。禁書著者たちは、己れの信じる思想も、政治的立場も、生活レベルも実にさまざまであったが、自分の境遇に照らして、異質の思考から掬えるものを自分の糧としそれを現実の世界で活用しようとする知的活動は活発であった。たとえば明朝の立て直しのために、いかに多くの工夫と提言がなされたか、あるものは武器で、あるものは羈縻政策で、あるものは内政充実で、それを切り抜けようとしたのであった。さらには王朝の存亡にかかわりなく、自然現象の説明に、詩作に、信仰や格物致知の議論に人々は熱中した。

注目すべき点は大量のディスカッションは、類似のものが何十年間もくり返されていながら、それをつっこんで皆で検討して次のステップへ進むという場面が朝廷にも文人サークルにも結社にも見られないことであった。個人のすばらしい発言は、たまたま皇帝に認められれば、国の政策になりうるが、ふつうはそのままのばらばらな意見にすぎなかった。個人の意見が結集して一つの体系となり時代の声となり、政界や社会や学問をゆるがすことはなかった。一つのテーマを中心に論じて、スパイラルに議論の質を高めて行くことができなかったのはなぜであろうか。近代の「ふし」にさしかかっていた中国がこうした弱点にさえぎられたのはなぜか。禁書著者たちの思考からは、中国的思惟の特質を考えるひとつの手がかりを見出すことができるように思われる。

（付記――本研究所および国内諸機関所蔵の清代禁書には、筆者未見のものがなお相当数あるため、禁書著者を概観した著者一覧表は、次稿にゆずらせて頂く。）